

第16回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第16回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇二二年度第16回「文芸思潮」エッセイ賞は、三四六篇という、昨年よりも七〇篇ほど多い熱い御応募をいただきました。今回も十代から九十代までの広い世代と同時に、地域的にもヨーロッパ、アメリカ、アジア、太平洋地域などから広く寄せられました。それぞれの貴重な体験だけでなく、歴史として重要な記録や、社会への鋭い批評や問いかけも多く寄せられ、現代に生きる人々の姿が反映された、レベルの高い内容でした。

例年の通り、まず選考委員会選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、その中からさらに最終選考作品が選ばれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって七月三十一日山梨県甲府市において最終選考会が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀作および優秀作を発表させていただきますが、以後奨励賞作品も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「久保木おばあさんの
最初で最後の授業」

椎名加奈子 (千葉県千葉市)

「校庭のエメラルド」

七森侑佳 (東京都杉並区)

優秀賞

「コロナ禍 仲間たちへの想い」

金田 薫 (神奈川県川崎市)

「母の電話帳」 斉藤はな絵 (北海道岩内郡)

「ドルジェよ、生きているか!？」

西島雅博 (福島県いわき市)

「母と雀」 丘田ミイ子 (東京都杉並区)

「ウイグル人の証言をきいて」

山田まさ子 (大阪府堺市北区)

「翡翠」 菊見洋介 (東京都西東京市)

「フタホシコオロギ」

沓掛理美 (東京都豊島区)

「途上にて」 西村徹也 (長崎県大村市)

「元安川の石」 田中美晴 (大阪府豊中市)

「仮の宿」 高田智子 (滋賀県東近江市)

奨励賞

「新聞、見たよ!」 石田真一 (大阪府堺市)

「桐タンス」 近藤幹夫 (福井県勝山市)

「ひきこも」もの愛しき軌跡」 音葉紬 (長野県上田市)

「店長」 植田郁子 (京都府京都市)

「父の温もり」 武中 彩 (福岡県北九州市)

「ボイラーメンテ」 anehako (東京都世田谷区)

「昭和からののがき」 安部としき (福岡県福岡市)

「記憶を失った君からもらった異常な愛情」

佐藤真規 (埼玉県越谷市)

「夕火」 森 瑞帆 (京都府京都市)

「夜のしじまの中で」 熊谷和代 (徳島県徳島市)

「ママ友」 朝比奈優 (東京都品川区)

「より添い猫と歩む明日」 春木美子 (静岡県三島市)

「幸い日和」 菅 幸世 (栃木県宇都宮市)

「ちいさな認定証」 渡辺 勝 (長野県上田市)

「老いを生きる術」 小池光一 (東京都渋谷区)

「ゴン」 馬込太郎 (静岡県浜松市)

「敗者復活戦」 小笠原敏夫 (山形県酒田市)

「母の書道」 池田茂夫 (神奈川県横浜)

(次ページに続く)

選評



みずき りょう
 作家・劇作家・演出家
 1942 北朝鮮生まれ
 99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
 2006 小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
 戯曲も多数ある

コロナ禍で生きる人々の想い

水木亮

コロナの問題は二年連続で続き、終わりが見えない。この厳しい感染状況のなかでオリンピックが強行された。利権に絡む政府の姿は、原爆が落とされるまで戦争の終結にためらった先の太平洋戦争の姿と重なる。何よりオリンピックが始まれば、国民はそれに夢中になることを読んでいる為政者の目論見が悔しい。歴史を学ばない日本は同じことをまた繰り返すのではないか。

この状況のなかで応募数は増えている。私は個人的にエッセイ教室を開いているが、やってくるのはほとんど前に「文芸思潮」に連載した「水木亮のワンポイントエッセイ」を改定したものである。興味のある方は是非読んでいただきたい。

今回全般的に作品のレベルは上がっていると思う。優秀賞も数が多いし特に奨励賞の数が多くなっている。ただし自分だけがこれは面白いと思いついてる作品もないわけではない。自分の関心やこだわり、その面白さを読む人に伝える、わかってもらう努力が肝心だ。

最優秀賞に選ばれた七森侑佳さんの「校庭のエメラルド」は、小学生の友達への観察、その視点がとてもユニークで興味がひかれる。事情がある少女が、作り話の中に自分の存在、生きる価値を考える願望は、どん底の環境を生きている人間の知恵である。土のなかにエメラルドが埋まっていると信じようとする、小学六年生の少女の姿が悲しい。これを共有する筆者の目が良い。ここには生きてゆく上で、どうしても小説やドラマを欲する人間の原点があると思う。優秀賞もなかなかの作品が多かった。心に残るいくつかの作品をあげてみたい。

沓掛理美さんの「フタホシコオロギ」は、飼育するヤモリの主食のコオロギについて書いた。死んでいくコオロギを観察し、その姿から日ごろ悩んでいる「もう一人の私」の姿を見つけた。コオロギがやがて人類の星になるかもしれない研究とあいまって、自分の未来にも希望を重ねて行

奨励賞

「聖山に登るべからず」 森崎律子 (大阪府大阪市)
 「祖父と私と新聞と」 藤田陽子 (神奈川県厚木市)
 「チューホフの『おじいさん』のように」 牧康子 (東京都杉並区)

「2日間しか生きられなかった僕のおじいさんの名前」 Paody (東京都杉並区)

社会批評奨励賞

「現代の危機」 楽加生 (神奈川県横浜市)
 「コンコルド効果」 佐藤陽平 (兵庫県神戸市)
 「EじゃなくてもAじゃないか」 比戸圭 (愛媛県今治市)

ニアの女性ばかりだ。「文芸思潮」のエッセイコンクールで私が感じるのは、男性の応募者が多いことである。若い人はもちろん、退職後本格的に文章を書いてみたいと思う男性などとても良いことだと思ふ。よりよい精神的生活を目指す上での気持ちの整理や、脳の活性化など、文章表現活動は大いに役立つだろう。

私事だがこの度山梨日日新聞社から「エッセイを書く」という新書(定価1320円)が出版された。これは、くところに夢がある。

西村徹也さんの「途上にて」は散歩に出ると、死んだ愛犬が連れ添う話だ。その散歩では戦争中苦労した母親など、いろいろなことを思い出す。秀逸は、「人も動物も死んだ後も身近な者が覚えている限り生きていく。それを思い出す時、心に灯がともる」というくだりだ。ただタイトルは大事である。もっと工夫したい。

西島雅博さんの「ドルジェよ、生きてるか!」は、旅先で関わりのあったチベット僧とチベットについて書いた。チベットは中国により弾圧された。あらためてそのチベット僧の健在を願い、またダライ・ラマの存在の大きさを感じる。

山田まさ子さんの「ウイグル人の証言を聞いて」は、中国政府によるウイグル人の強制収容所を書いている。強制不妊が行われていて、中国政府のこの不当な弾圧は許せない。その問題を自分の見た、野良猫の親が人間の目を恐れながら、いかに子猫にご飯を与えるかの姿に託して書いた。さらに自分の親の体験も重ねて、とても迫力のある展開になって共感する。

田中美晴さんの「元安川の石」は美術教師の思い出から原爆の記憶を書いている。ここに記憶される馬の背中へのクロイドなど事実を、私たちは後世の若い世代に伝えたい。高田智子さんの「仮の宿」はテント暮らしをする不思議

な老女とのめぐりあいを書いた。ここにも人生への想いがあり、読む者に伝わるものがある。

Paokyさんの「2日間しか生きられなかった僕のおじさんの名前」は名前について考えている。内容も悪くなく特に「名前を唱えると、心の中で光る」のくだりがよい。

丘田ミイ子さんの「母と雀」は雀に対する愛情にあふれていて心が癒される。

その他印象に残った作品を上げてみたい。熊谷和代さんの「夜のしじまの中で」は、日本歴史の汚点でもあるノモンハン事件を書いている。愚かな為政者による止まることを知らない戦火拡大。それは今回のオリンピックに見られるような、現代の為政者のやり方に通じる。

そこまで風刺が効くとエッセイが極めて身近なものになる。蒼 朔空さんの「個性」という言葉の魔力」は障害を生きる前向きな姿に好感を感じる。

植田郁子さんの「店長」は、「菓子はどんな時でも人の心を幸せにする力がある」と言った店長の現実の姿に、筆者の自分が添えなかつた悔恨が読ませる。

藤田陽子さんの「祖父と私と新聞」とは、筆者の孤独と波乱の人生の終末をよく書いている。

春木美子さんの「寄り添い猫と歩む明日」は、目の見えない捨て猫を医者に見せて助けた。そういう奇特な人もいることが、せちがらい世の中の救いでもある。

菅幸世さんの「幸い日和」は、牧場で牛の世話をした体験を書いた。「牛も人間と同様牛見知りをする」が楽しい。結城孝子さんの「我が家のロン」は猫に寄せる愛情が読ませる。

朝比奈優さんの「ママ友」はあらためて正面から「ママ友」とは何かを追求していて面白かった。

馬込太郎さんの「ゴン」は、愛犬が「ウゲッ」と反応して亡くなる、その最期を書いて泣ける。

藤野杏奈さんの「祖父と私」は正直に祖父の気持ちを書いてすがすがしい。

大谷重司さんの「保護犬との出会い」も動物に寄せる思いがよい。

昨年書いたが「生きていて癒やされる、生きていてほっとする」。現在人々はそういうものをエッセイに求めているように思える。コロナのこの厳しい状況にあつて、書くことは人の気持ちを整理し、いかに生きてゆくかをあらためて考えさせる。自分のかけがえのない人生を書くことで、読み手と共感し合えることは人間だけの喜びである。文学不毛とも言われる現代、人々にそんな味のある「文芸思潮」のエッセイコンクールであつて欲しいと願う。

佳作

「逆風のかなたに聞く平和の水音」 平野靖雄

「わがシラバスの花ひらく」 本間 浩

「かつての家族」 浜 葉子

「失敗のパイのバイ」 駆け出し編集者顛末記」 大島直次

「ボランテア」 友 修二

「穴」 山田菜里

「終い湯の常連客と一見客」 中武 寛

「感謝の一品」 古城 正

「消息」 寒川靖子

「五万回斬られた男・福本清三への頌歌」 松宮信男

「未来へのパスポート」 森千恵子

「マホという猫のように」 麴左之助

「母の覚悟」 竹山元一

「ある夏の体験」 平本節子

「島津の残滓」 今井 満

「保護犬との出会い」 大谷重司

「太平洋を越えて」 早月春美

「戴冠詩人」 杏藤 伶

「左の蝶々と別れを告げた話」 雪村 明

「統合失調症と診断されて」 辻村 明

「生と死」 有澤かおり

「色彩が浮かび上がる時」 松原泰子

「九か月間の友人」 和賀清流

「我が家のロン」 結城孝子

「ジャーマン・シェパードと私」 村松佐保

「先生と過ごした時間」 青地久恵

「南の島のムラサキシキブ」 末永卓幸

「百歳に乾杯」 木下富砂子

「母のクーポン計画」 仲田恵利花

「ぐうばあとぐうまあのこと」 茂木 彩

「サヌールの犬」 奈良 元

「朝の光が待てなくて」 オノカオル

「花の名前」 中牟田智子

「二階から目薬」 天城囀一

「そんな馬鹿なあ」 ペぺもんちーの

「怪人二十面相と鉄人28号」 大幸信明

「お母さんと呼ばれた日」 小山 咲

「跳べ！ キキ！」 磯野 桜

「コロナ闘物語」 竹中水前

「受者の眺め」 中村郁恵

「千夜を超えて」 成就志朗

「瞬きのうらおもて」 本間直也

「古里の記憶」 靨島彊子

「祖父と私」 藤野杏奈



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

豊漁で、レベルも高い

五十嵐 勉

第一六回文芸思潮エッセイ賞は三四六篇の作品が寄せられた。昨年は二七七篇なので約七〇篇の増加である。今年の特徴は、その応募数に比例して、レベル以上の作品が多く、豊漁だったことである。特に優秀賞、奨励賞、佳作の層が厚く、どれを残すべきか、どれを落とすべきか、ひじょうに迷ったのが正直なところだった。最終候補の作品数も例年の一・三倍あり、どれが奨励賞になってもおかしくない高水準の選考となった。五點法で、三点以上が奨励賞に値するものと、ひとまずの基準が決められており、四人の選考委員の合計が一二点以上になれば、例年なら奨励賞になる。しかし今年は一二点以上が六〇人に上った。やむを

かなりの数が寄せられ、時代は新しい戦いの中にあることも痛感させられた。

最優秀賞は今年も意見が割れ、評価が分裂したが、最終的に「久保木おばあさんの最初で最後の授業」と「校庭のエメラルド」に決まった。

椎名加奈子氏の「久保木おばあさんの最初で最後の授業」は、少女期、上の学校へ行けなかった老人の晩年の学習と、周囲の温かな配慮による憧れの実現の話である。後半、そのお礼にまもなく失明するという眼の病を押しして作った刺繍の鍋つかみと巾着袋を送ってきたエピソードがさらに胸を打つ。平明な文章の中に綴られた貴重な体験は残しておくべき重みを持っていた。

七森侑佳氏の「校庭のエメラルド」は不遇な家庭での抑圧を美しい嘘をつくことで逃れている虚構への逃避を描いた作品で、水木選考員が特に強くこれを推した。私は当初、横書きであったり、「嘘をつく」ことへ逃げる姿勢を美化していたりする点など評価できなかったが、これを生きる「切なさ」に昇華しているという捉え方に重点を置くならば、妥協してもいいと判断した。ある意味では、「久保木おばあさんの最初で最後の授業」のちょうど正反対に位置する作品である。「嘘をつく」ことには、虚構への逃避というプラスの面もあるが、社会的には繋がりや失っていくマイナスの面も大きく、この少女が将来成長して独力で社

佳作

社会批評

- 「『自点自服の茶』を楽しむ」 林 須磨
- 「二度目の中学校で学んだこと」 安納煮芋
- 「子育て終了日記」 冬野 星
- 「気まぐれな指先」 角 朋美
- 「この頃の人生観」 入江太一
- 「初夏の窓の外」 村山政子
- 「さよなら、スリッパ」 末永直治
- 「鬱からの旅立ち」 安楽和人
- 「わからない本」 J・ナカノ
- 「聞く力について考える」 すずらん
- 「四十年後の未来」 南條美起子
- 「ビジン語とクレオールそして外国語学習」 葛 恭嗣

えず下半分は落とさなければならず、涙を飲んでもらわざるを得なかった。

全体的には数の上で高水準となったが、逆に今回数が少ないように感じたのは、じっくりとした味わい深い文章でめっていることも感じたし、また戦争の時代を振り返る文章も少なくなっていることも事実だった。時代の趨勢はいたしかたないと寂しく思う反面、コロナ禍での大きな体験も

会に入っていくとき、そこに生まれる軋轢や悲劇の方が遥かに重大な問題になっていくだろう。「嘘をつく」ことには、罪過が伴うからである。家庭の圧力から逃れるために逆に学校での勉強に打ち込むという少女もいるかもしれない。前半の「美しい字」はそれを象徴していると言えなくもない。筆者には、人間の「虚」を突く視点に寄りかかることなく、正面から受け止める姿勢を今後に期待したい。今回は時代を反映してコロナ禍を題材にした作品がいくつかあった。金田薫氏の「仲間たちへの想い」は、コロナウイルスの蔓延によって、一流巨大ホテルが閉鎖倒産に追い込まれる過程を描いて、時代の傷まじさが切々と伝わってくる。コロナウイルスはこのような巨大企業をも倒していくのかという実感が迫ってくる。職を失った仲間へのいたわりと思いやりの上に、ホテルを維持する細かな心遣いと大きな努力が載せられて、ホテル業という大きな総体が血の通った生き物として立ち上がってくる。その面を見せてくれただけでも新鮮で、さらにそれがコロナウイルスの流行によって倒れていく壮大な悲劇を浮かび上がらせてくる点でも、出色だった。文章がもつと磨かれていて定着感が濃ければ、最優秀賞として推したいとも思った作品である。エッセイ賞には第一回から脈々として動物を題材にしたいわゆる「動物もの」が息づいているが、今回は久々にその領域のものが多く、優れた作品がいくつも上に昇ってきて

た。特に丘田ミイ子氏の「母と雀」は傷ついた雀を母が世話をし、それになつて命を通わせる話で、胸が熱くなった。最後は猫にやられるストーリーではあるが、その後の雀たちとの交流も心温まる命の通いがある。雀にも魂があることを感じさせる作品だった。

香掛理美氏の「フタホシコオロギ」も動物を題材にした作品だが、飼っているヤモリに食べさせるフタホシコオロギを育てているうちに、そのコオロギの生きる意思に気づかされ、「恐怖」や「知能」の存在を知る命の驚きに到達する物語である。この作品が優れているのは、さらにそこから自分も同じように「他者との関係性に悩まされながらがむしゃらに、繊細に生きていく」ことに気づかされる点である。それが普遍的なものとして世界に向けて大きく広がっていく覚醒が、素晴らしい。この覚醒は社会の荒波の中で世界へ向けて生き抜いていく強い力となっていくってほしい。

今回外国在住の方の作品は少なかったが、外国の問題に言及した作品がいくつかあり、その訴える力の強い二作品も優秀賞になった。西島雅博氏の「ドルジェよ、生きていくか?」と山田まさ子氏の「ウイグル人の証言を聞いて」である。西島氏の作品はチベット問題を扱っており、筆者の旅行中に親しくなった一人のチベット人を追懐することのうちに、生きた人間としての交わりの中から、重大な問

題の端に実感として触れている。このエッセイの意義深い点は、たとえ旅行者にすぎず、一度の交わりにすぎなくても、人間同士として触れ合ったそのことの中に直面する深刻な社会の問題を共有する力と可能性を示している点である。これからの世界は、通信の普遍化によって、ますます個人同士の思いを共有化する方向にあり、それがいつか世界を動かしていく希望の途上にある。この文章はそれを示してくれている。新鮮な力が宿っているように思った。

「ウイグル人の証言を聞いて」も、日本でたまたま行なわれた告発集会に参加してその強い印象を憤りとともに訴えている文章だが、ウイグルで行われている弾圧と圧政に人間同士として心を寄せ、真剣に受け止めているその共感の姿勢に、新たな可能性が感じられる。この共感には、「でも、何もできない」という傍観者の立場を超えて、新たな動きと行動に繋がっていく能動的なベクトルを生み出している。これもSNSなどを多用する今日の世界動勢の中では、将来への希望として大きな力に発展していく潜在性を秘めている。被害や弾圧を受けている当人に人間同士として寄り添い共感することが、新たな力となっていく、きわめて現代的な相を示唆しているところに新機軸が感じられた。付言すれば、チベットもウイグルも弾圧している主体は中国である。戦前・戦中と日本が大きく侵略して殺戮したその被害者であった中国が、今は逆に加害者の立場に立つ

入選

- 「血」 田中浩司
- 「人の悩み」 梅田慶一
- 「今がある―癌治療を終えて―」 田浦チサ子
- 「最後に見えるもの」 鎌田 誠
- 「母の死と魔の十一時」 倉沢辰子
- 「ゴビの恋模様」 菱川町子
- 「カメモシ」 まるもっこり
- 「脳裏にこびり付いている人」 佐高 源
- 「それぞれのたわごと」 ナガツチョ
- 「雪解けの大地に咲く花のように」 たかぎちほ
- 「悠久の大地 ハルビン」 苑田有子
- 「声なき声」 ゴルビー長田
- 「死に神様」 宮尾美明
- 「大家と私」 菅野晴子
- 「桜」 内田智久
- 「野菜」 玉置順三
- 「私の好きな色」 早藤青里
- 「姉の様子」 柴田節子
- 「恩師の形見」 西尾 吉
- 「カメが生き延びたのは」 野宮健司
- 「時を超えた沈黙」 長井 潔

- 「イノシシ村から」 重松博昭
- 「ある年の春のこと」 すみれ
- 「寮生登山」 金田一淳
- 「昔……あの行進曲があった」 足達重子
- 「AI時代の『勘ピューター』」 内海健一
- 「大震災、癒えぬ心の傷」 佐藤義弘
- 「三つで千円」 もりのみどり
- 「四ヶ月の休職中に感じたこと」 みけにゃん
- 「18歳からみた警官」 ジョン・スミス
- 「書店とは」 高倉麻耶
- 「人生百年というけれど」 横井純子
- 「就活動画を撮った話」 雨女
- 「アナキズムとの出会い」 高橋力也
- 「無駄の効用」 宮崎博之
- 「統合失調症と金の苦しみ」 原水
- 「まぶしい魚」 中村行寿
- 「算数の教え方」 前岡光明
- 「ピアノが綴る人生」 南風摩耶
- 「迷路からの脱出」 高岡啓次郎
- 「タクシー」 広瀬美月
- 「旅の人」 吉田宏子
- 「愛おしい日々」 ななきざまし
- 「声を上げよう」 下村きよ子

(次ページに続く)

て弾圧している現実がある。過去と現在のどちらの現実も我々がしっかり捉え、問題の本質を考えていくことが同時に重要だろう。

斉藤はな絵氏の「母の電話帳」は、地味な素材だが、九十一歳の老母がパソコンを習い、それで電話帳を作る話である。もどかしく教える立場と、衰えを抱えながらひたすら学ぶその交錯が、温かく老いを見守る愛情の綾をなして柔らかく味のよい手触りを生み出している。老いを見つめる眼と見守る眼に慈しみがある。読後感のいい作品になった。

菊見洋介氏の「翡翠」は変わった題材で、夫が妻から夜逃げをする話である。とんでもない女と結婚をしてしまつて、その暴挙に苦しめられ、やっと命からがら脱出する。今どきこのような逆DVの女性がいるのかと思われるようなひどさだが、救われるのは、たまたま遅れた初詣に見た翡翠のシーンである。この美しい鳥の鮮やかな羽ばたきの色彩に平穏な幸せのありがたさを覚える深い到達が、これまでの逆境と未来を救っている。これが作品をも高めている。好印象を残した。

以下、奨励賞、佳作まで印象に残る好作品は目白押しで、枚挙にいとまがない。あえて触れるとすると、六十八歳でプロのボクシング試合に立った「敗者復活戦」(小笠原敏夫)、ケーキ屋の裏表のペーソスを描いた「店長」(植た。早産から命の神秘のつながりを経験する「ひきこも」もの愛しき軌跡(音楽袖)、記憶喪失の友人からの痛切な手紙「記憶を失った君からもらった異常な愛情」(佐藤真規)、父親の桐タンスへの思いを描いた「桐タンス」(近藤幹夫)も、愛情の模様の深さを残して胸に残った。子を持つ主婦同士の仲間心理をユニークに書いた「ママ友」(朝比奈優)、ボイラーマンの苦闘の仕事をリアルに記した「ボイラーメンテ」(aneko)、チベットの遭難事件の周辺を掘り起こした「聖山登るべからず」(森崎律子)なども異色のいい作品だった。

社会批評の領域の「現代の危機」(楽加生)もよく現在の人間社会が直面している問題の本質を突いていたし、ビールのラベルに過ちを印刷した製品の「売る」「売らない」の是非を論じた「EじゃなくてもAじゃないか」(比戸圭)も的確な企業批判になっていた。

佳作の領域にも「文芸思潮」誌面に載せて、読んでほしい作品がいくつもある。宝石箱のような綺麗な煌めきがいっぱいである。また誌面でその文章を楽しみ味わって、この豊漁を愉しんでいただきたい。人生と世界の多様さ、深さが、また自身の生きる力を呼び起こし、共鳴して、何かを育んでいってくれることを心から願っている。

入選

- 「修学旅行」 山岡竜弘
- 「諸行輪廻の響きあり」 原 護一
- 「わたしの話」 ちたん
- 「洋服病院の洗濯物は、いつ見ても朗らかだった。」 五六八我楽
- 「青年と海とイワシ」 笠原英一
- 「そのプラスチック、必要ですか？」 花津絵美
- 「祖父の源流をたどる」 堂もマルク
- 「男の隠れ家」 下野昌代
- 「それはキシウローレル号に始まった」 龍野 健
- 「ヨロンと私とモリ・ヨーコ」 秋里洋子
- 「学校祭狂詩曲」 山田吉生

田郁子)、新聞による広報が人間を根本から鼓舞する「新聞見たよ」(石田真一)、認知症が深まる母と字の事を描いた「母の書道」(池田茂夫)も、鮮やかな刻印を残した。また、「動物もの」の、死に瀕した猫を助けて寄り添って生きていく「寄り添い猫と歩む明日」(春木美子)、愛犬の最期が泣かせる「ゴン」(馬込太郎)、都会を出て北海道の牧場で牛たちといっしょの貴重な体験をする「幸い日和」(菅幸世)も、動物の温もりを感じさせる好エッセイだった。



みかみ ひろし

作家 1945 山梨県甲府市生れ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書 「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

対話のできる作品

三神弘

作品は作者と読者の間にあって、作者の言葉に導かれ、読者の言葉が誘い出される。書くことと読むことの中に、創造の場がある。エッセイの面白さは、対話ができる作品であるかどうかにかかっている。声の聞こえてくる作品、といいかえてもよい。

最優秀賞の七森侑佳「校庭のエメラルド」からは、敏感な「私」の他者への身構え、距離の取り方、それゆえのあこがれが伝わってくる。「友達というものは本の中にしか存在しない空想の生き物ではないか」と疑い、「私は自分に話しかけ、干渉しようとしてくる同級生たちに怯えきっていた」とも打ち明ける。

そして、おのずから全く異質な少女に「惹かれ始め」て

いくのだが、「彼女の読者になっていた」とあり、「多数の物語を内包する一冊の本になっていった」ともいい、複雑な内面をうかがわせ、得難い表現になっている。卒業式が近づいた冬の日、少女は「教室に戻らずに座り込んで土をいじり始め」る。校庭でエメラルドを掘り出そうという少女の「作り話」に付き合うのは、むなししい夢の建設であり、徒労だとも、「私」は承知している。しかし、その夢に熱がこもっていくところが読みどころだ。

ここから、こんどは「私」の成長の物語がはじまっているのだろうか。読者はその物語に思いをめぐらせ、発展させていく。この「私」は世俗へのあこがれをもちつつ、なじみず、決して傷つくことのない、また、エメラルドではない、硬質な、ダイヤモンドの精神を磨いていくのだろうか。こうしたことも読後感であり、対話ができ、読むことの楽しさになっていく。

意識的な作品で、方法があり、構成も表現も洗練されている。

優秀賞の高田智子「仮の宿」は「駅舎の階段下の空洞に」ホームレスとおぼしきテントに「目を疑った」ことからはじまっていく。「真冬のことだ」「犬も吠えだて」と、テントのなかから「寒さのためか、顔のあかぎれた老女」が「野生動物のような鋭い目つき」を向けたという。作者は「その晩は寝付かれなかった。夫は単身赴任中で

飼う。そして雀は「回復する体力に比例するように母に懐いていった」という。

作品は娘のまなざしをとおして描かれていく。それゆえ母の実像が細やかに観察され、生き生きとし、間近になる。また、娘との関係のありようも、情愛にも接することができる。対話もできる。どこでも見かける雀だが、「雀の寝顔や水飲みの愛らしさ、たったひとつの存在であるあることの愛おしさ」とある。

娘のもとへある日、母からメールが届く。「ぴい子も羽ばたくという天性を体感しました」と記されていた。庭の木まで高く飛んで、その後、母の手の平に戻ってきたという。「母はとても愛情深い、自然や動物の本能を重んじている人」と、娘は生きる態度を学んでもきた。

やがて雀とも別れなければならぬ日がくる。「迷い込んだ野良猫にやられてしまった。その最期を母は悔やみ、自分を責め続けた」とある。しかし、その後の「でも、猫も悪くないやんか、本能やもん」という言葉が、娘の胸に残る。雀をとおして「いのち」が語られ、雀とともにある母の日々が描かれていく。

素材さに打たれる。素材さを描くのに、しかし、素材な表現では成り立たない。技術が必要だ。このことも読みどころであり、作品の質を高めている。

一軒家には犬一匹、「牡丹雪が落ちてくる」と自己紹介する。ふと出会ってしまったテントの老女の「身の上」を案じたりもする。雪で埋もれ、隠されてしまった老女を「私」は心配し続ける。

町内会の住人達は「ああ、あのね」「どこの誰かは知らないけれど、誰でもみんな知っている」と「顔を見合わせて笑った」という。天気予報が春の嵐を告げた日、「私」は老女に「よかったら、うちに来ませんか」と声をかけ、「自分でも驚いてしまった」とある。わが家の庭に、老女はテントを張り、「私」は彼女と「仮の宿」で一夜を明かす。テントで暮らす老女も奇妙であれば、声をかけた「私」もまた奇妙である。縁もゆかりもない間柄である。老女は翌朝、「庭中の草取りをして帰っていった」という。人助けだとか、やさしさとか、思いやりとかの感情とは、無縁の関係である。そもそも、名前とてない人物だ。ましてや作品には、何の訴えこともない。「私」も「老女」も謎になっていく。

説明も省かれているから、読者の読む領域が広がっている。しだいに、見知らぬ土地の奇譚を読む心地となっている。その昔の雪の日の情景ともなっていく。

優秀賞の丘田ミイ子「母と雀」の母は、怪我を負って飛べなくなった雀を、長い間世話をしてきた。ペランダや庭の安全な場所でエサをやり、雨の日、寒い日には家の中で



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など 構成作家としても活動中

自宅待機のリモート選考会

都築隆広

身内からコロナ陽性患者が出て、濃厚接触者になった。自分のPCR検査の結果は陰性だったものの、保健所から二週間の外出禁止を義務づけられ、選考会に出席できなくなりました。

リモートでの参加となった。たまに電話がかかってきて状況を聞いて、意見を発するというのが、しかも、どういった議論の末にこういう結果になったのか、大まかなところしかわからない。最優秀賞を狙える個人的に踏んでいた「仮の宿」が優秀賞におさまり、最優秀賞となったのは「校庭のエメラルド」と「久保木おばあさんの最初で最後の授業」だった。「仮の宿」も「校庭のエメラルド」も

エッセイと呼ぶには物語運びが上手過ぎる印象で、双方とも短編小説を読んでいるかのようだった。創作や脚色ではなく、実話ゆえに虚構っぽさが出たのだと信じた。とはいえ、どちらも作者は稀有な才能の持ち主だった。

一方、「久保木おばあさんの最初で最後の授業」は実話らしさが溢れていて、書かれている内容は素晴らしい。ただ偏屈な私は、この作品が三人称文体、語り手らしき人物を「女教師」と書かれているところが引かかった。三人称で書かれていたら、実話であってもそれはエッセイではなく、小説なのではないか？ 否、大きな嘘さえなければエッセイでええじゃないか？ と果てしない自問自答を繰り返してしまふ。読者様のご判断は如何に？

優秀賞「ウイグル人の証言をきいて」は常連の山田まさ子さんの投稿作。内容も考えさせられるが、やはりこの人の売りは独特の文体と、せつなさのある作風であろう。作家性もあるので、今や一般投稿者として応募してくるのがずるい気もする。

奨励賞「チエーホフの『おじいさん』のように」は長年、編集者を勤めあげた作者だけあって、地に足がついた語り。それでいて「え？ こんなことまで書いちゃっていいの」と思われる記述も交えるあたりが巧みだ。

他に推薦した作品としては奨励賞「コンコルド効果」。

「UFOキャッチャー依存症になる」というテーマに驚かす。佳作「わがシラバスの花ひらく」はいわゆる「すべらない話」系のエッセイ。当選作や優秀賞は難しい水準だけれど、個人的には多くの人に読んで欲しい作品の一つだった。同じく佳作「五万回斬られた男・福本清三への頌歌」は伝説の斬られ役俳優、福本清三との思い出を役者と脚本家経験がある作者が綴ったものだ。日本映画や時代劇の裏話が大好きな私としては、この作品が最優秀賞になっても異論はない程であったが、やはり審査員支持を集められず。興味がない人には刺さらない話題だったのやも知れぬ。

かくして、まさかのリモート出席で、推薦する作品以外の動向はよくわからなかったりもする。新型コロナウィルスは自分で気をつけていても、家族や隣人が気をつけるとは限らないし、何より、己や身内が感染する可能性は考えられても、「すでにもう感染している」という可能性は意外や、考えられないものであった。今や、親しい人間とすら最低限の距離をとって生活すべき時代なのだろう。外出禁止になるまでのくんだりを一投稿者としてエッセイにしたために衝動にかられるも、この程度のネタでは奨励賞も難しかろうと筆を取らなかつた。そのくらい今年には豊作であり、これだけ質の良いエッセイが集まったということは、おそらくはステイホームの副産物である。時がたち、コロ

されるし、知られざるUFOキャッチャーの仕組みについて細かく書かれているのも興味深い。依存症というテーマも含めて現代的な題材だと思った。コンコルド効果、別名サンクコストバイアスとは私も最近、知った言葉である。男性が元カノのことを忘れられないのに、女性側がどんなに忘れるのは、男性側が飯を奢ったり、愚痴を聞くなど、付き合う前からコストをかけていることが多いので「コンコルド効果」だ、と、恋愛の話題にも使える単語だったりする。「コンコルド効果」の意味や由来をもう少し本文で詳しく解説していれば、完成度が上がったことだろう。

同じく奨励賞「ママ友」。母親ですら「女性」の一面が見えて信用できない語り手が、「ママ友」という立場ならば周囲の女性とも関係が築けるといった内容。これは現代の女流文学で多いテーマで、マジョリティーとは異なる価値観を持ちながら、派手に抵抗するわけでもなく、なんとか世間との折り合いをつけて生きて行く女性の姿である。こういうテーマは長編の純文学小説よりもエッセイ向きなのだと、改めて思い知らされた。

続いて奨励賞「記憶を失った君からもらった異常な愛情」は自分のことを一方的に好きだといひ続けてきた男との顛末。こちらも「仮の宿」や「校庭のエメラルド」と同じく（作者には失礼ながら）「虚構かのような短編小説風エッセイ」である。こんなことが現実起こり得るのか？

ナ禍がやがてベストやスペイン風邪の時代のように埃にまみれた頃、この「文芸思潮」も過去の空気を知らしめる貴重な一史料となることだろう。



2021.7.31 選考会風景／甲府市「かつぼう三井」にて

久保木おばあさんの最初で最後の授業

椎名加奈子



「先生、私はこうして勉強することがどんなに楽しく幸せな事か」こういった授業を終えた女性教授に話しかけてきてくれたのが八〇歳を超えていると思われる老婦人でした。彼女はいつも一番前の席にすわり、大きくうなずきながらその女性教授の授業を聞いています。いつの頃から彼女は大学の公開講座の授業に参加するようになり、もうかれこれ数年も毎回講座が開かれるたびに熱心に通ってくるのです。

ある日、授業が終わって珍しく質問をしました。その質問の後で、「なぜこのように熱心に授業に出ていらっしゃるのですか？」と女教師が聞いたのです。すると、彼女はこういいました。「先生、実は私は小学校しか出ていないのですよ。私が小さい時には女は教育はいらないという考えが当たり前でした。私は学校で勉強するのが好きで

好きでたまりませんでした。しかし私の父親は、女が勉強なんてとんでもないと行って、私が小学校を卒業すると、すぐに家の手伝いをやらされるようになったのです。朝から晩まで弟や妹を背負って家の台所の手伝いをずっとやっていました。その後、結婚をして子供を育て、やがて夫が旅立ち、ようやくこのように一人になって、私は小さい時から自分はずっとやりたかった勉強を再びすることができるようになったのです。だから、こうして毎週学校へ来て、机の前に座り先生のお話を聴けることが私にとってどんなにしあわせなことかといつもこの幸せをかみしめているのです。今の大学生の人達は本当にうらやましい限りです。朝からずっと大学へ来て好きな授業を聞くことができるのですから。ですから、授業を休んだり学校へ行きたくないなんて考える人たちはとても贅沢だと思っています。私だったら一分たりとも先生の言葉を聴き逃したりはし

せん。授業は私にとって宝のような至福の時間なのです」彼女は続いていきました。「先生、私の小さい時の夢は学校の先生になることでした。一度でもいいから学生の前で授業をやってみたいというのがずっと私の夢でした。もうこの年になってしまい、この夢はかないませんが、こうして学校に来て授業を受けることができるだけでも、私の夢はかなえられたのかなあとも思っています」

その話を聞いて女教師は思いました。勉強をしたくてもできなかった人が今、ようやくそのチャンスをもらって一生懸命勉強している。一方で授業をさぼったり、学校へくるのもめんどくさがついている、やる気のない大学生が同じキャンパスにいる。こういう学生に彼女の話を一度聞かせたいものだ。そこで、その女教師は彼女に次のような提案をしました。「もしよかったら、私のゼミの学生に今のお話をしていただけませんか？ 学生たちは勉強できる機会に対し、感謝どころか中には出来れば授業をさぼりたいとか、やる気を見せない学生もいるのです。久保木さんのように勉強ができることに喜びと感謝と幸せを感じるその心を学生に話して下さらないでしょうか？」「えっ？ 私にですか？ とんでもない、人前で話したこともないし、話す実力もありませんし、とんでもありません。そのお話、とてもうれしい話ですが、私にはそんなこと到底無

理なお話です」「でも、昔は先生になりたかったのではありませんか？ 誰かの前で教えるのが夢ではなかったのですか？ 別に難しいお話をする必要はありません。久保木さんが今私に話して下さったことをそのまま、もう一度先生に伝えて下さいませんか？ 勉強できるチャンスというのがどんなにありがたいものなのかを率直に語っていただければよいのです。きっと学生たちも勉強することについて考える機会になるのではと思います。久保木さんにとっても一つの夢をかなえる絶好のチャンスですよ」

久保木さんは最初もじもじしながら、それでもだんだんやってみたくてという気持ちで顔に現れてきました。そうして二人の話が終わるころには、次の月に久保木さんが学生たちに自分の体験談を話すという授業が行われることが決まりました。

やがてその日がやってきました。久保木さんは淡々と、小さい時に女だからと学問をする機会を父親に阻止され、それ以来半世紀近く、父に任せ、夫に任せ、息子に任せ、ようやく一人になってついに小さい時からの夢をかなえるべく学校の公開講座に通い始めた話をしてくれました。彼女のかせみ室はシーンとなって、学生たちはその話を一言ももらすまいといった表情で聴き入っていました。魂がこ

もった語りでした。

学生たちが感動している空気が教室を流れました。素晴らしい授業でした。彼女の話が終わると、割れんばかりの拍手が湧き起こりました。また、久保木さんもついに念願の自分の授業をすることができた達成感が顔に喜びと溢れていました。久保木さんは学生たちの教室いっぱい大きな拍手にちよつとホツとされたようでした。とても満足そうでした。こうして久保木さんの小さい時の夢がなったのです。

やがて大学の公開講座も終了し、女教師と久保木さんもう会うこともなくなりましたが、ある日突然、女教師に小包が送られてきました。久保木さんからでした。その中に手紙が入っていて、久保木さんがきつと生涯実現できないだろうと思っていた学生の前で話をするという体験をすることができた感謝の気持ちが綴られていました。同時にお礼の品が入っていました。それは藍染の布にキルトのように白糸でステッチされた美しい鍋つかみと巾着袋でした。藍色の布地に刺した白糸の刺し一刺しが久保木さんの人柄を伝えていました。これを作るのに何カ月もの時間がかかったことがわかる作品でした。これらは久保木さんから女教師へのお礼のプレゼントでした。このような心のこもったプレゼントを見たことはありません。なんとお礼

を言おうかと困ってしまう程、美しい刺繍が施されたプレゼントでした。

そこで、早速お礼の電話をしたのです。何回かの電話の音でようやく久保木さんが電話に出てくれました。そこで早速、このギフトのお礼を言ったのです。そして「この美しい刺繍は久保木さんがなさったのですか？」と聞くと「そうです」と答えてくれました。さらにそのあとの言葉を聞いて、女教師は絶句してしまったのです。もう一つの実実は久保木さんの片目は失明していたのです。もう一つは目もあまり良く見えず、間もなく両目が失明することになるだろうとのことでした。したがって、不自由な目での時間をかけてこの刺繍を仕上げたと言うではありませんか。そのためにお礼をお送りするのが遅れたのだ。そしてこの作品が彼女の最後の作品になるだろうと電話の向こうで淡々とその女教師に述べたのです。

これらのギフトは彼女の最後の作品だったのです。「なぜこのような大切なものを私に下さるのですか？」と女教師が驚いたように聞くと「先生は私に小さい時から半世紀も抱いていた夢をかなえて下さった恩人です。生徒の前で話をするなんて、私にとっては夢のまた夢でした。その夢を叶える機会を先生は下さったのです。なんとお礼を申し上げてよいのか私には分らないくらいです。ですから、

受賞の言葉

椎名加奈子

私の父は癌で小学生の時に他界しました。その父の葬儀の時に、父は文章を書くのが好きで、コンテスタに応募して賞も取ったことがあるというエピソードを父の友人が弔辞で読み上げ、その言葉がずっと私の記憶の隅に残っていました。私も父の真似をしていつか作品を応募してみたいと思っており、ようやく挑戦してみたところ、まさかの受賞！この予期せぬ受賞の知らせに父と同じ喜びと幸せを実体験することができました。この醍醐味を忘れずにこれからも文章修業を続けたいと思っています。ありがとうございます。

最後の視力を使ってこの刺繍をやりました。先生が喜んで下さったら、私も本望です。間もなく私は失明して授業にも出られなくなるでしょう。実は先回の公開講座が私にとつて最後の参加のつもりでした。しかしその後、先生から学生の前で授業をして欲しいと言ってお話をされ、私も最後の勇気を振り絞って話をさせていただきました。教室の学生達の顔はほんやりとしか見えませんが、割れんばかりの拍手は私の耳元にまだ残っています。そして視力を失ってから私も私はこの素晴らしい記憶だけでこの先、元気に生きて行くことができます。先生、本当にありがとうございます

こうして久保木さんは静かに受話器を置いたのです。先生は思いました。「勉強ができる幸せをかみしめる」これを学生たちにこれからも伝えて行こう。これが久保木おばあさんの最初で最後の大切な授業の教えだったからです。そして同時に自分も教える喜びをかみしめよう……。



椎名加奈子

しいな かなこ

1946 千葉県生まれ

10年近くをアメリカで過ごし、帰国後は教員として勤務。退職後は在職中から続けていた自然保護のお手伝いを続けています。また、学生と一緒に続けていた途上国支援活動はコロナ禍で現在は休眠状態ですがいずれは再開したいと願っています。

校庭のエメラルド

七森侑佳

「友達」というものは本の中にしか存在しない空想の生き物ではないか。そう疑ったまま、小学二年生になった。五歳で字を読むことを覚えて以来、ろくに人と話さず本ばかり読んできたせいだろうか。私は自分に話しかけ、干渉しようとしてくる同級生たちに怯えきっていた。本は自分のペースでページをめくって情報を受け取ることができ、あちらから何かをしてくることはない。しかし人はその逆だった。相手のペースで勝手に情報を提供してくるし、私のページを唐突にめくろうとしてくる。理解不能だった。私は図書室に逃避し、休み時間のほぼ全てをそこで過ごした。たまに遊びに誘われても曖昧に笑って逃げた。

しかし二年生の中頃のことだった。私は、廊下の掲示板に張り出されていた隣のクラスの生徒のワークシートの中に、一枚、際立って整った字で書かれたものを見つけた。自分の名前を使ってあいうえお作文をする、という下らない内容で、書いてあること自体はお粗末なものだ。「書

けと言われたので書きました」感丸出しの適当な文章なのに、印刷されたような端正な文字が美しく並んでいる。「高はるな」というのが筆記者の名前だった。平仮名で三文字「はるな」と書く、均整が取れた楕円が三つ横並ぶのだということをおはるなは初めて意識した。廊下を通るたび、その字を盗み見た。

字が際立って美しいというだけのもので、私はその「高はるな」に惹かれ始めた。どんな子がこの字を書いたのか。できればその字の上手さをひけらかすような性格でなければいいなと思った。周りの人に褒められながら、積極的に能力を伸ばしていったのではなく、一人、孤独に懸命に身に付けたのであってほしかった。彼女を取り巻く世界はなるべく静謐で、独立したものであってほしかった。端的に言えば、私は「高はるな」が自分と同種の人間であることを期待していたのだ。クラスメイトから逃げまどいながらも、私は人を理解すること、理解されることを諦めき

れなかったのだと思う。なるべく自分と近い人間の方が理解しやすく、されやすいだろうと、そのように想像していたのではないか。私の期待はかなえられそうだった。事前に席を調べ、休み時間などにこっそり隣の教室を覗き込んでみると、「高はるな」は誰とも喋らずに静かに俯いている、内気そうな少女だった。私と違って本すらも読んでいない。空っぽの机を、彼女はただ見つめていた。

三年生に上がるとき、クラス替えて「高はるな」と同じクラスになった。接点を持つチャンスだと私の心はひそかに沸き立った。同じ教室で観察を続けるに従い、私はますます彼女に惹きつけられていった。「高はるな」はたまに誰かに話しかけられても、私のような作り笑いすらしない。縦に首を振るか、横に振るかどちらか。私が社交性を欠いているのは同級生を恐れているからだだが、彼女は恐らくそうではない。本当に同級生がどうでもよくて、どう思われようが構わないと考えているようだった。いいなあ、と思った。その方がずっと生きやすい。

そして「高はるな」にはもう一つ魅力があった。日頃はほぼ喋らない彼女だが、国語の授業で音読を頼まれた時だけは立ち上がって教科書を読み上げる。淡々とした読み方なのだけど、声が美しかった。鈴を鳴らすような声、という表現通りの声質で、どんな文章にもアンニュイな雰囲気

をまとわせる。ますます憧れた。字と声が美しく、物静かで、クラスメイトに媚びず、恐れてもいない。彼女のようになりたかった。同じクラスになるまで、私は彼女ならば対等に関われる友人になってくれると思っていた。しかし、いつの間にか私は彼女に憧れ、一種崇拜さえしていたのだ。

憧れ続けて一年近く経った頃、たまたま彼女と同じ班になった。どうにか近づこうと私は、折に触れて彼女に話しかけてみた。最初は縦横に首を振るだけだった彼女も、次第に会話のようなことをしてくれるようになった。一つ壁を越えてしまえば、意外にも彼女は非常に饒舌だった。しかし気になる点があった。それは彼女がかなりの頻度で作り話をすることだ。それもかなり稚拙な内容の。

「中学受験をするために、家で毎日二十時間くらい勉強している」と言われたことがある。

「国語と算数と理科と社会、それから図工と音楽と体育も試験科目だからたくさん勉強しないといけないんだ」

すらすらと喋るものだから、頭の鈍い私はすっかり信じ込んで、それじゃ体もたないよ、などと言っていたのだが、家に帰ってから、あれ、一日は二十四時間だ、と思いつく。たくさん勉強をしていたのは本当かもしれないが、学校に行きながら毎日二十時間というのは、さすがに

誇張されていただろう。

同級生から、「高のいうこと信じない方がいいよ。あいつ、すごい嘘つきだから」と言われたこともある。一年生の九月頃に転入してきた高さんは、始めのうちは色々な人に話しかけられていたらしい。しかし、その度に誇張した作り話を繰り返し、次第に愛想を尽かされて孤立したというのだ。年に数回、何か月か海外旅行に行く、とか、家にシェフがいて毎食フルコースが出てくる、とか、ちょっと掘り下げられたらすぐに嘘と分かるような話ばかりを、あたかも事実のように語っていたという。

しかし、その同級生が教えてくれたもう一つの話の方が、私には衝撃的だった。それは小学二年生の、体育の授業後のことだったという。体の弱かった高さんは基本的に体育の授業には参加せず、教室で自習をしていたから、教室で着替えをする女子たちはみんな、授業終わりに高さんが一人残っている教室に、わーっと駆け込んでいくのが当たり前になっていた。しかしその日は様子が違った。一番に来た子が教室の扉を開けてみると、そこには高さんだけではなく、瘦せた背の高い女の人がおり、皆のいる前で高さんのことを怒鳴り散らし、頬にビンタをして、カツカツと音を立てて教室を出て行ったというのである。

おそらくその人は高さんの母親だった、と同級生は言ったが、私はしばらく信じられなかった。私の母親はかなり誇り高い人だ。高さんの母親は、高さんが幼い頃から、誰か彼女以外の人が塗ったに違いない。母親ではないか。それを考えていると、寝る前に読んでいた物語の続きを布団の中で空想しているときのような気分になった。冬でも着ている長袖と、それに隠されたリストカットの跡、たまたま頬に貼っている絆創膏。何を見ても想像を掻き立てられた。

思えばこの頃から私は、彼女の友達ではなく、読者になっていたと思う。高さんは嘘を交えて自分の話をする。私はそれを勝手に読み取り、勝手に掘り下げて想像を膨らませる。そういえば高さんは、私に何かを質問したことは一度もなかった。彼女から干渉されなかったのも、私は安心して読者でいることができた。次第に彼女は私にとって人間ではなく、多数の物語を内包する一冊の本になっていた。

中学一年生になってすぐ、高さんは失踪した。幸いにして数週間で見つかったが、その間に何をしていたかは決して言わなかったという。別の中学で焼いていた私は、そこにどんな物語があったのか知りたくて、何度か彼女の住んでいたマンションを訪ねてみた。けれど、部屋の表札は外されていて、まだ彼女が住んでいるのかどうかすら分からなかった。

卒業が近づいた小学六年生の冬の日、珍しく体育の授業に参加していた高さんは、授業が終わった後、教室に戻ら

温厚な人だったから、我が子を叩く母親というのがうまく想像がつかなかったのである。

しかし、それを立証するような出来事がそれからすぐ発生する。高さんと一緒に下校していた時のことだ。私たちは話しながらゆっくり歩いていた。とある角を曲がった時、私はそこに、鬼のような形相をした女性が一人立っているのを見つけた。

「はるな」

そう威圧的な声を出し、その人は高さんの細腕を、爪や指が食い込むくらいの強さでぎゅっと掴んだ。そのまま、私には目もくれず、彼女を引っ張るようにして帰って行く。あの人だ、と直感的にわかった。高さんを教室でビンタしたというお母さんに間違いない。そんなに帰宅が遅れたわけでもないのになぜ怒っていたのだろう。色々考えたがわからなかった。それから高さんは一緒に帰ってくれなくなった。

その後も度々怪しいことがあった。一度、高さんが両手をカラフルな油性マジックでぐるぐるに塗って登校してきたことがある。どうしたの、と尋ねると、家で転んでしまい、手をついた位置にたまたまマジックがあった、と言う。転んだ先にボーリングのピンのように並べて立ててある複数のマジックペンを私は想像し、絶対に事実ではないと思った。利き手と関係なく、左右均等に塗られているか

ずに座り込んで土をいじり始めた。どうしたの、と言って私が横に立つと、彼女は私を見上げてこう言った。

「ここにエメラルドが埋まっているの。ルビーやサファイアも」

彼女は校庭の土に細い指先を差し込むようにして、少しずつ掘っていく。

「へえ」

いつもの作り話だ、と思ったけれども私は信じたふりをして、彼女の横で一緒に校庭を掘り返した。教師に呼ばれるまで、いつまでも。あの時のことを私は今でも、折に触れて思い出す。エメラルドが出てきたらどうするか、という話はしなかった。けれど、もし聞いたなら彼女はこう答えたかもしれない。

「すぐに全部売る。そのお金でこの街を出ていく」

今にして思えば彼女の作り話は全て、「こうであればいい」という願望の塊だったのだ。力もお金もない小学生が、自分の置かれた状況を辛く厳しいものと悟った時、そこに抗う術が果たしてどれほどあるのか。彼女は作り話に逃げ込み、私はそれを熱心に読む。その繰り返しで私たちの三年間だった。校庭を二人で掘っていた私たちの姿は、教師からは「友達」と見えただろう。しかし私はあれをもっと特異で、稀有な関係性だったと考えている。

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）。

応募資格●不問

応募規定●4000字以内（極力パソコン A4用紙出力のこと。やむをえない手書きの場合はA4原稿用紙を使用する／B4は失格）。※**応募審査料1800円**を郵便為替で同封のこと。パソコン原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。別紙に①応募部門（第17回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④性別・年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。⑨応募審査料1800円を郵便為替などで同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは15USドルを同封。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

※恐縮ですが応募審査料1800円を御協力
くださいますようお願い申し上げます。

賞●エッセイ賞 ■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀作 ■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞 ■賞状・賞メダル 佳作・入選 ■賞状・記念品

選考委員●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2022年3月31日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2022年6月25日発売の「文芸思潮」84号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作・優秀作は2022年9月25日発売の「文芸思潮」85号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

受賞の言葉

七森侑佳

幼い頃から口下手で、自分の考えたことを口頭で相手に伝えるということがいつまでたっても苦手なままです。文章として書いてまとめることの方がまだ得意なので、世の中全てのコミュニケーションが筆談であればよいのに何度願ったかしれません。

今回エッセイにまとめさせていただいた内容もそんな、『筆談ならば伝えられるのに』と思っていたことの一つでした。少し変わった同級生と、内気な私との交流という形で家族に話してみたこともありましたが、どうしても一番大切な部分、一番伝えたい部分が伝わってくれないのです。

限られた文字数ではありませんが、個人的にはこの文章の出来には満足しています。何より、自分自身も自覚していなかったような考えや記憶が執筆の過程で表れてきたこと、そのような気づきも含めて一篇にまとめられたことが嬉しいのです。

素晴らしい賞をいただき、大変光栄です。これからも書き続けていきたいと思っています。



七森侑佳

ななもり ゆうか

1994 東京都生まれ

2017 大学を卒業

専攻は日本文学

同年より大学院へと進学し、研究を続ける

2019より都内のIT企業にて勤務

Amazon どうぞ

コロナ禍 仲間たちへの想い

金田 薫

退職後、四年近くが経った。すでに退職した仲間ではなく、今も働いている仲間たちへの想いをつづる。

昨年初来、コロナ禍が世界中を襲っていて、当面収束する気配はない。日本での犠牲者は令和三年七月で一万五千人、アメリカでは、その数十倍が亡くなり、感染者は世界で二億人とも言われている。

創業から五十年、伝統、格式のある、日本を代表するホテル。ここも、コロナに被弾、今年六月末で営業終了を余儀なくされる。このホテルで十三年働いた。最後の職場。金融から、転じた。

入社時に社長から言われた事。「ホテルでは1000引く1は、99ではなく0です」と。宿泊客は、まずフロントで、チェックイン、ベルボーイが、荷物を運ぶ。客室係が、部屋を清掃し、ベッドメイクをする。レストランや売店の利用もある。どこかでサービスや気配りが欠けると、その

客は、戻って来ないという意味だ。チームワークが、求められる。ピュアなサービス業だと思った。

東京の中心、皇居に近い九段下にあり、東には神田の街並みが広がり、西には、靖國神社と、高校、大学などが。便利だが、静謐な環境。地下鉄東西線、半蔵門線から至近。立地の良さも、ホテルの売りだった。淡い琥珀色の外観、二十四階建。客室が470、レストランは、和、洋、中、喫茶、バーなど6つあり、宴会場も16あった。一階には広いロビーと右手にフロント、左手には、喫茶、軽食の取れるカフェがあり、メニューの豊富なビュッフェが人気だった。地階には、和食と中華のレストラン、二階には、プロ野球のドラフト会議も開かれた八百人収容の、ボールルームがあり、ここでオリンピック・メダリストの祝勝会や新春コンサートが催されていた。三階、四階の宴会場では、企業や学校、同郷の懇親会などで賑わっていた。六階から

二十二階は客室フロアー、最上階、二十三階に、フレンチレストランと、バーがあった。晴れた日は、富士山が望める。一月は、新年会、三月、四月は、近隣に学校が多いこともあって、入学式、卒業式後の懇親会や謝恩会。千鳥ヶ淵の桜を愛でた後の食事会など。六月は、株主総会。秋のイベントシーズンには、同窓会や、ふるさとの集まりなど、さまざまな会が開催され、十二月には忘年会。年間の来客数は、国内外合わせて、延べ五十万人にのぼる。

昨年二月から客足は途絶えて久しい。レストランや、宴会場の利用もばったりと、止まった。人の集まりのための場所。それが、密閉、密集、密着がコロナ感染拡大の原因で、「不要不急の会は避けよ」と、言うのだから、たまらない。ホテル経営が立ち行かなくなった。トップは断腸の思いで、二月初め、営業終了の断を下した。需要の回復が見込めない中、開けているだけで莫大な光熱費や、清掃費、材料費がかかる。そして、もちろん人件費も。日々流れる血に、耐えられなかったのだ。

営業終了の連絡を受け、真っ先に、また今も思うのは、ホテルで働く、かつては、笑顔でお客と接していた仲間たちの顔。少し頼りないが、誠実で、皆「いいやつ」だった。一人一人、思い出すことが出来る。いつもロビーで背筋を伸ばし、挨拶するマネージャー。五百人の顔を覚えていた。馴染み客は、到着して、彼の顔を見ると、ホッとすると言う。



ホテルグランドパレス

テキパキと宿泊手続きをする、フロントのベテランスタッフ。カフェの入り口で笑顔を決やさず、客を出迎える、女性マネージャー。炎天下、寒空の下、共に営業に勤しんだセールスマン。自慢の料理に腕を振るう、コックたち。時には理不尽なお客に怒鳴られても、ひたすら耐え、頭を下げ続けることも。「他に雇ってくれる所もなかったので」「土農工商・ホ（テル）。最下層の身分だから」と、卑下する輩もいた。ホテルは典型的な、労働集約産業。人の数で勝負している。従って儲けは薄く、サラリーは安い。それでも接客が好きで、ホテルに就職した彼ら。フロントで、レストランで、宴会場で生き生きと、笑顔で、懸命にサービスに努めていた。

コロナがやって来る前までは。今はみんな、途方に暮れているだろう。職を失う彼らの生活は、これからどうなるのか。

創業、1972年、幾多の危機を乗り越えてきた。創業翌年には、オイルショック。同年の夏には、後に韓国大統領となる要人の拉致事件も起こった。度重なる円高、海外からの客は来ない。1995年に、『阪神・淡路大震災』、2011年にも、『東日本大地震』に見舞われる。直接ホテルの建物に被害が及ばなくとも、大災害によって、人の移動が妨げられると、ホテル利用は激減する。2003年には、南アジアで『Sars』が流行、2008年に米国

発、『リーマンショック』。海外で発生する災禍で、外人客が来なくなった。

過去、幾多の困難は、従業員の努力によって乗り越えてきた。ただし、今般のコロナ禍は特別な魔物。なまじの営業努力や経費削減では、克服出来なかった。姿の見えない敵、突然やってきて、いつ去るのか、誰もわからない。仲間たちの困惑、苦渋を思いやる。

自身は取引銀行出身で総務、経理、営業を担当した。銀行員関係の、宿泊、レストラン利用、懇親会、同期会、歓送迎会、など様々な利用があった。現役、OB、役員、部長、支店長など多くが来館してくれた。

個人的にも、海外勤務時代、帰国時の定宿はここ。またアメリカ在の娘の日本での結婚式、披露宴はこのホテルで実施した。関西の親族や、アメリカ人の婚の家族は、来日して、宿泊した。婚礼、宴会場、調理担当が、全力で盛り上げてくれた。人生最良の日。

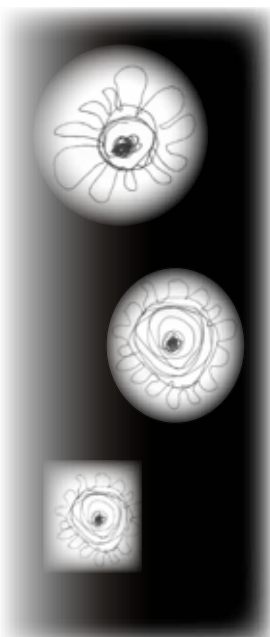
宿泊、定例、非定例の集まりの多くがキャンセルされてしまった。自粛に加え、政府、有識者は口々に、集まりを避けよというのだから。

コロナ禍でやむを得ないと、簡単に割り切れない。従業員たちは、職を失えば、生活が出来ない。みんな、困窮している。さりとて、ここの他の働き口が、簡単に見つかる筈もない。

今回のコロナ禍は、観光、宿泊、飲食業は、致命的なダメージを被る。営業休止や停止が相次ぐ。食材、備品などの納入業者、清掃、クリーニングの請負いなど関連のところも、煽りを食う。街に失業者が溢れる。ついこの間まで、「観光立国」、「GOTOキャンペーン」と、政府主導で、皆が言っていたのは、何だったのか。

火事、食中毒などホテルに付きもののリスクには常に備えていた。「火事、食中毒は絶対起こしません」と。「おいしい食事」、「行き届いたサービス」とともに、社是に謳われていて、全従業員がそらんじ、身に沁みこませていた。が、誰もコロナ禍など、想像しなかっただろう。

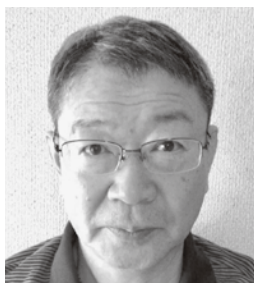
仲間たちのこれからは、どうなるのか。あまりにも重い厄災。既に退職した身では何も出来ない。虚しく、悔しい想い。せめて、仲間たちが、気を取り直して立ち上がり、新たな道に進むことを祈るばかり。



受賞の言葉

金田 薫

コロナ禍のため、営業休止を余儀なくされたホテル。その従業員たちは、仲間だった。ともに懸命に、サービスに取組んだ彼らの無念を伝え残すことが、義務だと、このエッセイに取り組んだ。ホテルと従業員たちへの鎮魂歌。あの、九段下のホテルのことかと、思い出していたら、幸い。今回のエッセイ受賞は、これからもエッセイを書き続けていく上で大きな励みになります。ありがとうございます。



金田 薫

かねだ かおる

1952年生まれ、69歳
1974早稲田大学卒業
同年三和銀行（現三菱UFJ銀行）に入行、国内外の勤務を経て
2004ホテルグランドパレスに出向
総務、企画、経理、営業などを担当
2017退職
川崎市在住

母と雀

田田ミイ子



母がその雀と出会ったのは八年前のことだった。実家の庭先で足に大きな怪我を負って飛べなくなっているところを見つけた。「鳥が飛べなくなつた」ということは、ごはんにも寝床にもありつけない。不憫に思った母は、いつ飛べるようになってもいいようにと家のベランダや庭の安全な場所でエサをやることにした。洗濯物を干しながら話しかけたり、栄養価の高いエサをあげたりしているうちにその雀は元氣を取り戻し、そして回復する体力に比例するようみるみる母に懐いていった。そんな雀を母も愛らしく思った。

「ぴいぴい」となくその子を母は「ぴい子」と名付け、時々「ぴいちゃん」と呼んだ。ひねりこそないが、母に名前を呼ばれるその度に小刻みに左右に首を傾げたり黒い瞳をぱちくりぱちくり動かしたりと、ぴい子自身も「自分はぴい子なのだ」と思っていていくようで、その様子はなんだかとても愛くるしかった。

とはいえ、怪我をして弱っているぴい子だ。雨の日にはの姿や群れを見かけることは至って珍しいことではない。けれども、間近で見ると寝顔や水飲みへの愛らしさ、触れることが叶わない場所に手が届くその時に感じるいのち、たったひとつの存在であることの愛おしさ。それらには望外のときめきがあった。

母はとても愛情深いのが、自然や動物の本能を重んじている人でもあったので、「家の外にいた方がいい」という葛藤をいつも抱えていた。だけど、体力は回復したものの、怪我をしたぴい子の足が元に戻ることはなかった。母が見守る中、何度もその羽を広げる練習をしていたけれど飛ぶことは難しかった。もう飛ぶことのできないぴい子を敵しい外の世界に戻すことは死を意味する。それが自然の摂理であったとしても、母にはそんなことはとてもできなかった。そうして、ぴい子はうちの子になった。ぴい子は、わたしは帰った時も度々飛ばうとしていた。パタパタと羽根を一生懸命動かして、ちよつとずつ浮いたり、一步二歩跳ねられるようにはなつても高くは飛ばたけなかった。季節のおいさをのせた気持ちのよい風が吹いたり空が驚くほど美しいと、ぴい子が外の空気を、空の世界を知らないことを悲しく思った。温かく晴れた日には必ず、庭先の安全な場所にぴい子のカゴを置きに行く母は毎日そう思っているに違いなかった。エゴの緑と小枝の間から呼び、たくさんの伸び「ぴい」と羽根を揺らしながら仲間を呼び、たくさんの伸

家の中、寒い日には家の中、雪の日なんて絶対に家の中。そうしていつのまにやら大体を家の中で過ごすようになった。東京に住む私の元にもそれらの様子は届いた。母のスマートフォンには同じ角度で連なって切り取られたぴい子の写真が日に日に増え、それはまた私も同じだった。たくさん撮った写真から数枚を選んで送るのではなく、撮った分全てを送ってくる母。その全てをカメラロールに保存する私。「かわいらしいなあ」「元氣になったねえ」。電話越しにぴい子の話をする時にはいつも、母の向こうにいるぴい子に話しかけるような声になった。あまり動物に懐かないわたしには珍しく、ぴい子はたまにしか帰らないわたしにとっても懐いてくれたのだった。頭や肩に乗ったり、手のひらでごはんを食べたり眠ったり。わたしはなぜだろう、昔から雀の頭ってなんだかすごく愛おしいなあと触れられずも思っていたので、まるっころんとした頭を撫で、小さな瞳がゆっくり瞬きするのを見た時には思わず胸がいっぱいになった。公園にも家の前にも、田舎でも都会でも、そ

間がぴい子のカゴに止まるとまた、「ぴいぴいぴい」となっていた。その愛おしい頭を撫でていたいけど、ごはんを食べられないからと言ってこの家にいることがいいことなのかは、依然母にも私にもわからなかった。

だけど、二年ほど経った五月のある日、ぴい子は自分の足で飛んだのだった。カゴのまま庭の木にかけたら、いなくなっていた。母は心配で「ぴいこ、ぴーこ」と何度も呼んでさがした。すると、車の上で「ぴいっ、ぴびっ」と返事をした。そして、母の顔を見ると「ほら、飛べるよ」と言わんばかりの眼をして、車から桜の木まで高く飛んだ。

「ぴい子も飛ばたくという天性を体感しました」
 たった一枚の写真が添えられたメールにたった一言書かれたその言葉には、母の二年分の葛藤と願いが滲んでいて、私は山手線まで泣いてしまった。

春の、はじめての春の、ひかりとみどりが香ばしい皐月のおいがぴい子にもしていたらいいなと思った。その後、ぴい子は桜の木から母の手のひらに戻ってきた。

そのまま飛べるようになっていたなら絵になるお話かもしれないけれど、新緑の季節に一度空を飛んで以来、ぴい子が再び空を飛ぶことはなかった。

そして、死んでしまった。

一瞬の出来事だった。安全だったはずの庭先で、ふとどこからか迷い込んだ野良猫にやられてしまった。その最期

を母は悔み、自分を責め続けた。

「猫が来た時、ぴい子飛ぼうとしたんちゃうよるか」

母のその言葉がいつまでも胸に残っている。そしてその後、母はこう言った。

「でも、猫も悪くないよんか、本能やもん」

母は真っ白な布で清潔なベッドをこしらえ、花を添え、いつも使っていた水差しと小さな枕を添えてぴい子を弔った。ぴい子が家に来てから三年の月日が経っていた。母が悪いはずはなかった。空を飛べないぴい子に、一度空を飛んだぴい子に、母ができることをしていただけだった。何を言っても母を励ますことはできず、電話越しに泣いてしまふことも憚られた。遠くの空の下で、今、ぴい子はいなくなってしまう。電話を切ってベッドの中に潜り込んで泣いた。母と雀を想って、泣いた。

落ち込む母に不思議な出来事が起きたのは、ぴい子を見送った二日後のことだった。ぴい子と全く同じように、ケガをした雀が庭先に落ちてきたのだ。

母は、懸命に世話をした。それは、祈りに近いように思えた。ぴい子が来た時と同じように、話しかけ、エサをやり、ベランダで飛ぶ練習をさせた。そうして数週間を我が家で過ごしたその雀は見事に空へと飛んで行った。母は、ぴい子にしたかったことを全部したのだと思う。

あの日、母はどんな気持ちだっただろう。その雀がぴい子として母の姿は、ぴい子の時と変わらなかった。「ここは一時保育やで」

母は二羽にそう話しかけて笑った。三歳の娘は「ちっちゃいねえ、かあいい」「とぼうねえ」と励ましていた。本当にうまく言えないけれど、私はその時母の子どもで嬉しさと強く思った。

雀界で噂になりつつある母の小鳥保育園で、これまで空に巣立った雀は三羽。傷が深く、もう飛ぶことは望めなかったぴい子だって空を飛んだ。飛んだんだよ。きらめく新緑の季節に一度だけ、桜の木に向かつて。

小さな頭、柔らかな羽根、愛らしい目。この二羽も羽ばたくという天性の喜びを感じる日がきつと来ますように。ひかりとみどりの香ばしい風を受けながら、広く青い空を高く飛べる日を願って、母と娘と私、小さなクチバシにせつせとエサを運ぶ夕暮れ時。いのちを想う五月だった。



子よりも空高く飛び立って、もう手の中には戻ってこなかったあの時、母はどう思っただろうか。うまく言えないけれど、私はその時母のそばに帰りたいと思った。不思議な話には続きがある。

ぴい子を見送って以来、そんな風にケガをしたり巣から落っこちた雀が、まるで母の元を訪ねるように度々ベランダや庭に来るようになったのだ。ちょうど娘を連れて帰省したゴールデンウィークには、二羽の雛が落ちてきたこともあった。私は娘と一緒にそのお世話をせつせと手伝った。日が昇る頃にエサをやり、必ず様子を見にやってくる親雀に会わせて無事を知らせ、日が暮れる頃にまたエサをやる。母は、親雀にも「ちゃんと子育てしてるなあ」と声をかけた。

「日中に親のクチバシからもうのが、一番やからな」そう言っていて、度々親雀との様子を見に行つては、不足分だけを補う形で室内の見えないところでエサをあげる。雛のエサは穀物に水気を加えて柔らかくしたもの。先端をクチバシのように細くした割り箸に乗せて。水はストローで少しずつ。やさしく手のひらで体を覆って、頭を撫でながら、頭を撫でる時、まるっころんとした頭を撫でるその時、

ぴい子を思わずにはいられなかった。「ぴい子も、空飛んだもんなあ」

私がぴい子と思うと同時に母が言った。五月はぴい子が飛んだ季節だ。あるべき姿を尊重しながらその命を守ろう



丘田ミイ子

おかだ みいこ

1987 滋賀県生まれ
2011 年より「杉田美粋」名義でフリーライターとして活動
雑誌を中心に映画や演劇に関するインタビューやレビューを執筆する傍ら、ことばにまつわる個展を不定期開催
2018 年よりペンネームを「丘田ミイ子」に一新、仕事と子育ての狭間でエッセイや詩、小説を執筆

受賞の言葉

丘田ミイ子

姉妹が絵画展に入賞する度「素敵な絵が描けたらいいのに」と思っていた。象に見えない絵の横に「ぞう」と書いてしまう子どもだった私は三十を過ぎた今も「言葉」に手を伸ばしている。私よりも素敵な象を描く娘が言った。

「ママ、しょうをもらったの?」

文筆業10年目、生まれて初めてもらった賞だった。

「読んでみてくれる?」

絵心、みたいな言葉が文を書くことになればいいなと思しながら、私は今日も言葉に手を伸ばす。

途上にて

西村徹也

私が住んでいるのは、山間地区の里山だ。家の背後には、モチノキの林があり、乾いた白い樹皮が、寒々しく風に吹かれている。家の前方は浅い谷になっており、葎の葉が生い茂る細い流れがある。その清らかな流れの中に、時折小鮒の影が見え隠れする。

家の右側には収穫後の閑散とした蜜柑畑が広がり、まるで祭りの後のように寂しい。左側は小高い丘となり、雑木林がある。雑木林の向こうには、善良な隣人の家があり、ささやかな農家の暮らしが営まれている。口の悪い人は、この村を限界集落だとののしる。たしかに村には、子供の姿はなく、腰の曲がった老人しか行き来しない。しかし、何の不满があるというのだろうか。あと三十年もすれば消滅する村だとしても。

毎日夕方五時になると私は散歩に出かける。黙々と起伏の多い小道に歩みを進める。しばらくすると死んだはずの愛犬が散歩の道連れとなる。もちろん幻覚だが、私は愛犬の細やかな息遣いをはつきりと感じる。私の前になり、後ろになりしてそばを離れない。時折私の顔をそっと見上げ

る。澄んだ目がとても美しい。まるで雨上がりのガラス窓のようにつややかだ。

私たちは、ひっそりとした蜜柑畑を通り過ぎる。濃淡の緑に包まれた蜜柑畑が左右に開けると、水田の中の一本道に繋がる。道の両側の畔に可憐な水仙が咲き並んでいる。水仙は、冬が好きなのだろう。なぜだか嬉しそうだ。

一月の冷たい風に吹かれながら、手に息を吹きかけて歩み続けるうちに、懐かしい人たちの顔が次々に浮かんで消える。

今から十六年前に亡くなった義母の顔を思い出す。いつも静かに微笑んでいる、しわだらけの小さな顔だ。八十三歳だった。常用していた薬を間違えて飲むようになったので、妻に頼まれ、同居していた。義母は、夫を病で亡くした後、二十年以上も一人で慎ましく暮らしていた。幼少のころから奉公に出され、苦勞に苦勞を重ねてきた人だが、常に他者への思いやりを忘れない人だった。義母の口から他人の悪口を聞いたことがない。

同居して半年ほどたった頃の日曜日、突然、義母は椅子

から転げ落ちた。あまりにも激しい勢いで倒れたので、妻は悲鳴を上げ、抱きついて起こそうとしたが、義母の意識はすでになく、体は硬直しピクリとも動かない。私は、急いで救急車を呼んだ。

国立医療センターの集中治療室に入り、三日目に義母は安らかに息を引き取った。脳梗塞だった。亡くなる一日前に、妻はキリスト教会のシスターを呼んだ。義母は、敬虔なクリスチャンだったからだ。シスター三人が祈りの言葉を唱えている時、驚いたことに義母の枕辺に備えてあった心拍数計や血圧計など四つの測定器の数値がみな上昇し、正常値を超えた。義母は聞こえていたのだ。医者からは意識はありませんと言われながらも聴覚はしっかり働いていたのだ。義母の固く閉じた眼が、涙でうつつすらと濡れていた。穏やかで平安な時間が過ぎていった。この世は不条理なことばかりだが、善良な人が安らかな死を迎えることができるのはとほっとする。

木枯らしの吹く水田を過ぎると道は広い雑木林に入る。朽ちた枯れ葉が、細い道に敷き詰められ、柔らかな感触が靴底から伝わってくる。愛犬は、さも楽しそうに雑木林の中を駆け回る。薄茶色の体毛なので雑木林の中に溶け込んでしまう。この犬は、保護犬だった。前の飼い主に虐待されていたのを動物管理センターの方々が助け出し、それを私たちが譲り受けた。そして、長い時間をかけて信頼関係

を築いていった。私と妻以外の人が手を出すと必ず噛みつく犬だった。とても愛らしい顔をしているので、知らない人はつい頭をなでようとする。何度止めたかしかない。

老犬となり、徘徊をはじめた頃、腹部に無数の腫瘍ができ処置不能となった。私は、無残な姿を見るに忍びなく安楽死を選択した。獣医が筋肉弛緩剤を注射した。私は頭を撫でながら愛犬が息を引き取るのを見守った。魂が激しく揺さぶられ、私の体は震え続け、涙は堪えようもなく流れ続けた。

自宅の庭に深く大きな穴を掘り、妻が花で布団を作り、その花の寝床に愛犬を横たえた。まだ生きているように体が温もりを持っている。顔や頭や体を撫でながら、少しずつ少しずつ土をかけていく。埋めてしまった後の喪失感は大きかった。自分を心の底から信頼し、愛してくれる存在を失って、はじめてその大切さに気付くなんて、なんと私は愚かなのだ。

雑木林から鬱蒼とした竹林に入る。折からの激しい風に揺れる竹林を抜けると、一車線の埃っぽい道路に出る。時折山奥の工事現場に向かう大きなダンプカーが通る。人が歩いているにもかかわらず、小石を跳ね飛ばしながら猛スピードで通り過ぎていくダンプカーもいる。いったいその運転手の頭の構造はどうなっているのだろうかと思議でならない。



西村徹也

にしむら てつや

1954 長崎県大村市生まれ

國學院大學 文学部卒業

様々なアルバイトを経た後、長崎県の
中学校教員となる。

2020 退職

現在は、エッセイや童話の創作にいそ
しんでいる。

人間の著しい賢愚の差は、どうして生まれるのだろうか。遺伝によるものなのか、それとも生育環境の違いのせいなのか、あるいは、その両方に起因するのだろうか分からない。しかし、愚かしさは、時として取り返しつかない大きな罪を生む。私の従妹は、二十歳の時、原付バイクで大学に通学していたが、暴走族の大型バイクに追突され、脳挫傷を起こして死んだ。ヘルメットが吹き飛ぶ程の勢いでぶつかって来た暴走族の若者は、裁判で不起訴となり、その後ものうのうと暮らしているようだ。一人娘を亡くした叔父と叔母の悲しみは、四十余年が経過した今でも癒えることがないというのに。

ダンプカーに注意しながら百メートルほど歩くと、大根畑が広がっている。愛犬は、すっかり抜き取られた後の荒涼とした大根畑を自由に走り回り、さかんに尻尾を振っている。私に「おいで、一緒に遊ぼうよ」と言っているようだ。大根畑の畔には、可憐な水仙が、慎ましく咲き並んでいる。微笑むように咲いている水仙を見てると、母の顔が脳裏に浮かぶ。母は、水仙が大好きだ。昭和二年生まれの母は、今年九十三歳になる。今は有料老人ホームに入所している。父が肝臓がんで死去した後、十五年間一人で実家を守ってきたが、寄る年波に勝てず、歩けなくなってしまった。

「どこにも行きとうなか」と、泣いていたが、長い時間をかけて説得し、やっと入所に同意してくれた。今は、施設

と呼吸するたびに肺が洗われていく感じがする。

坂道を上りきると、家の隣の蜜柑畑に戻る。愛犬は、私の掌に鼻をくつつけて、撫でてくれとせがむ。心を込めて撫でてやると、さも満足したように尾を振りながらどこへともなく消えていく。

「いのちなんだな」

私は、そう呟く。人も動物も、生きて在ることが大切なのは勿論だが、死んだ後も、身近な者が覚えている限り生きているのだと、この頃よくそう思う。死後生というらしいが、私は、僧侶でも宗教学者でもないので詳しいことは分からない。ただ、誠実に一生懸命生きてきた人や動物を思い出す時、確かに心の中に暖かい灯がともるように感じる。そして、眼底を流れるといわれる悲しみの川があふれそうになる。

の方々に優しく介護していただきながら、塗り絵をしたり、ペン習字に取り組んだり、短歌を作ったりしながら楽しんで暮らしている。しかし、本心は、七十余年暮らしてきた実家に戻りたいに違いない。母の希望をかなえられない私は、自分のふがいなさに心を痛める。

義母と同様に、母は苦勞に苦勞を重ねてきた。昭和一桁生まれのほとんどの女性は、戦争という重い荷物を背負われ、教育も満足に受けられず、その日その日の食い扶持を確保するためだけに、必死に生きてきたように思える。母の最終学歴は、尋常高等小学校卒業だ。卒業後は、戦闘機の製造工場に動員され働いていた。敗戦後の辛酸は筆舌に尽くしがたいものがあつたようだが、母は何も語らない。

悪い時代に生まれたと嘆くことはなかった。ただひたすら忍従の道を誠実に歩み続けた母たちの世代の女性に、これからは、幸せが訪れますようにと願わざるを得ない。私は、苦しみや悲しみを受容し、優しさを深めていった人たちを、心から信頼し、尊敬する。村や町で母と同世代らしいおばあさんに出会うと、自然に頭が下がるようになった。道は、大根畑の脇を抜けて小さな雑木林に入る。落ち葉が敷き詰められた切通の坂道を一歩ずつ上る。右も左も土手のように土が盛り上がり、その上を濃い緑の木々が厚く覆って薄暗い。朽ち果てた落ち葉の匂いと苔むした黒土の香りが混ざり合い、冷気とともにツンと鼻を刺激する。ひ

受賞の言葉

西村徹也

第十六回「文芸思潮」エッセイ賞優秀賞に選んでいただき、非常に光栄に存じます。

選考委員の方々並びに、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

昨年三月に中学校教員を退職し、その後エッセイや童話を書き始めました。先達の文章を参考にしながら、自分の考えや思いを文章化することは、楽しく、また時に苦しい作業です。しかし、こうして文章を書けるといふ境遇にいられることを幸いに思います。戦争、特に原爆の、地獄のような悲惨さに遭われた方々のことを、私は、けっして忘れまいと心に誓っています。

この受賞を大きな励みにして、愚才なれど書き続けたいと思います。誠にありがとうございました。



フタホシコオロギ

沓掛理美

また一匹、死んだ。

とはいっても、ペットの金魚やメダカが死んだのではない。ましてや、私の愛犬や愛猫では断じてない。

コオロギが、死んだのである。正式名称は、フタホシコオロギ。日本には分布しない種で、おそらく日本人が「コオロギ」と聞いて思い浮かべるものよりもすこぶる大きく、一言で表せば「気持ち悪い」。軽い気持ちでその名前を検索しようものなら、おそらく五割ほどの人は、画像が表示された瞬間にスマホを投げ落としてしまうだろう。参考までに付け加えておくと、ゴキブリに類似した見た目である。本種は、見た目もさることながら、鳴き声も凄まじい。

「ジリ、ジリリリ。ギギ……ゴリゴリゴリ」
このオノマトペを書いている今この瞬間も、「風流」という言葉より「騒音」という言葉がびったりな鳴き声が、部屋中にやかましく響いているのである。

コロナのせいで授業がオンラインになった私が、教室全
「こんなに死なれては、餌にできないではないか！」
一体誰が、コオロギ飼育がこれほど難しいと予測できた
だろうか。私は後から知ったのであるが、実はヤモリ飼育
の鬼門はこのコオロギの飼育だったのである。そんなこと
もつゆ知らず、私は「たかが虫がこれほど繊細だなんて
……」と半べそをかきながら、バラバラ死体を埋葬する代
わりにゴミ箱に捨てた。
すぐ横では、手のかからないヤモリが、すやすやとお利
口そうに寝ていた。

来る日も来る日も、コオロギは死んだ。顔だけしかない
もの。身体が半分しかないもの。変色したもの。グロテス
クな死骸の放つ異臭に辟易しながら、私は何度肝を冷やし、
彼らの生息を憎んだか分からない。

さて、コオロギを死なせないためには、彼らのことを熟
知しなければならぬ。少しでも生存率を上げたいと、私
は本意ながらヤモリ以上に熱心に観察を続けるうち、彼
らがあるものを有することに気がついた。「個性」である。
足が速く、常にせかせかと動き回っているもの。おっと
りとしていて、跳ぶ気もなさそうなもの。よくよく見れば、
ケース内を歩き回る数百匹のコオロギ全てに、個別の性格
がある。姿形すら、色の濃淡から体格に至るまで違いがあ
った。

体に向かって「コオロギがうるさくて、すみません……」
なんて珍妙な謝罪をする羽目になったのも、全てはこのコ
オロギのせいだ。

ご推察の通り、私はこのコオロギが特別好きだというわ
けではない。ではなぜ飼育しているのか。それは、私が愛
するヤモリの主食が、このコオロギだからである。
生来爬虫類好きの私は、新垣結衣も飼育しているという、
外国産の大型ヤモリの飼育を夢見てきた。そのため、餌で
あるコオロギの飼育も、スズムシのお友達を家に呼び寄せ
るような気分で気楽に始めてしまったのだ。

そこからが、地獄の日々であった。
見た目や鳴き声、ついでに今書き加えたい強烈な悪臭な
どは、可愛い問題であった。なにせ、本種の一番の問題は、
とにかくすぐ死ぬことだからである。

水分不足、湿度不足、湿気過多、食料不足、温度不足、
共食い、衛生問題、自家中毒、溺死、不審死……。
二時間サスペンスドラマも驚きの、死因の豊富さ。

今まで十把一絡げに扱っていた虫の集団が、実は個性の
群れだと分かると、ほんの少しだけ飼育が面白くなった。
その発見の数日後、私はさらに思いがけないことに気が
ついた。

餌やりのため、私が手を入れて捕まえようとすると、ど
れだけ鷹揚に構えていたコオロギでも、血相を変えてケー
ジ内を逃げ惑うのだ。今まで自分が跳べることを知らな
かったような呑気なコオロギすら、ケージの壁を越えるほど、
高く跳んだ。

コオロギにも、「恐怖」が、そして危険を察知する「知能」
があった。

突然、背筋に怖気が走った。水を体に当てられたような
気分のまま、呆然とコオロギたちを見つめた。文字通り、
微動だにできなかった。

……均一的で脆弱だと思っていた虫の群れが、実は個性
豊かな知性の集まりだったなんて。

あれほど悩まされた繊細さは、裏を返せば奥深い生命の
一部だったなんて。
そうしたら、人間の一方的な都合で嫌われ、餌用に飼育
され、ゴミ箱に消えていったあの何百のコオロギは、何を
思っていたのだろう。私はどんな権利で、彼らを無為に死
なせ、ヤモリのケージに放り込んだのだろう。

……命に貴賤はない。そんなことは当たり前だと思って

いたのに、私は今の今まで本質的なことを理解していなかった。それぞれの生命の大切さが、彼らが名前に冠する「フタホシ」の意味が分かっていたいなかった。

また一匹、死んだ。

ケージの中では、弱った個体が、ひっくり返ったままもがいていた。私はすがすがしい気持ちで、彼を起き上げさせた。一見、他のコオロギと同じ見た目になる。私は微笑んだ。数時間後、彼は仰向けのまま動かなくなっていた。絶望的な気分のまま、静かにその死を悼んだ。

ふいに、私は理解した。私も、このケージの中のコオロギとおなじだ。ケンカしたり、怪我をしたり、他者との関係性に悩まされながら、集団の中でがむしゃらに、そして繊細に生きているのだ。これは「もう一人の私」なのだ。きっと、このケージ内だけではない。自宅の庭にだって、街中にだって「もう一人の私」は見つけることができるのだ。見つけられないのは、自らの狭窄な視野と、尊大な自尊心のせいだ。

現代の日本は、見た目の美しさや、目に見える個性を他者に求めている。そして、他者を主観で簡単に切り捨てる。——「気持ち悪い」、「うるさい」、「臭い」と。

就職活動を進めている私は、己の平凡さに、醜さに、他者との差異のなさに苦しんでいる。



沓掛理美

くつかけ さとみ

長野県出身

早稲田大学在学中

受賞の言葉

沓掛理美

この度は、優秀賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。

エッセイを書くのは今回が初めてだったので、この投稿を通じて、自分の気持ちに向き合うことや、文字にして表現することの重要性に改めて気づかされました。

この度の受賞を励みにして、これからも日常で感じた小さなことを、素直に綴っていきたいと思います。あらためて感謝申し上げます。

でも、私は今思うのだ。本当の個性は、素晴らしさは、紙切れで表せるようなものではない。表面的には見ることができなくても、毎日を必死で生きるうちに輝きだす、二つ星のようなものである。そして、短所、長所を含めて、多様な個性を尊重できることこそが、本当の美しさなのである。

私たちは、目先の瑣末なことに囚われて、重要なことを見失ってはいないだろうか。また、先入観で、自分の世界を狭めてはいないだろうか。

現在、フタホシコオロギは、人間の食料不足を解消するタンパク源であるとして研究が進められている。名実ともに、人類の「星」となるような生物なのだ。

今日も、私はコオロギの世話をしている。昔と違うのは、数年の試行錯誤を経て、できるだけ彼らの生命が無駄にならないように飼育できるようになったことだ。そして、彼らのおかげで少しだけ広くなった世界で、私はフタホシコオロギの背中を、「もう一人の私」を、私たちの社会を見つめるのである。

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

〔東京〕

ジュンク堂池袋本店

紀伊國屋書店新宿本店

〔大阪〕

MARUZEN&ジュンク堂梅田店

〔インターネット〕

アマゾン



短編小説集

雪女郎

原石 寛

原石寛氏の作品を読むとその後立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいた美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無数に散り、踏みだかれて埋められていったものの姿が、三味線の音に乗って乱舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、情しみと呪詛をも含んだ人間の美の影への鎮魂であろう。

アジア文化社

——五十嵐勉

原石寛畢生の短編小説集
1600円(税込/送料共)

母の電話帳



斉藤はな絵

母が古くなった電話帳を書き替えたいのでパソコンを習いたいと言った。札幌にいる私の妹にその話をしたところ、妹がすぐにネットで、中古パソコンの中から手頃なものを見つけてくれた。そして、それは去年の十二月に母の元に届いた。

母は私の家の隣で一人暮らしをされていて、買い物以外身の回りのことは全部自分でやっているが、なにぶん九十一歳だ。パソコンは私が教えるとして、さてどこまで覚えられるか。

まずは文字入力だが、母の学生時代はローマ字は敵性文字だったので、ほんの少し習っただけということだ。しかし何とかローマ字で頑張ってもらうことにし、指使いは最初にきちんと覚えると後が楽なので、私は使用頻度の高い文字を豆シールに一文字ずつ書いて母の両手の指、それぞれに貼った。

「Aは左手小指だよ。Iの字は右手中指だからね」

母はパソコンのそばにローマ字一覧表を置き、指のシールを見ながら、最初は「『か』は、えーっとケー・エー」

ネットを引いて私の世界は大きく広がり、仕事でもそれが活用できて、パソコンは私にとって五十代なよりの収穫となったのである。

母のキーボードの指使いに私が、あれっ？と思ったのはそれから半月が経ったころだった。指の動きが以前より少し早くなってる。しかも使っているのは一本の指だけではない。だんだん文字の場所がわかってきたのか。

母が言った。

「やっぱり教えてもらった通りだったわ。右にある字は右の指で、左の字は左指で打った方がやりやすいわ」

それは、〈練習の成果はきちんと表れる〉ということをして私が目の当たりにした、ちょっと感動の場面だった。しかしそれからが大変だった。

私は母が少しでもわかるようにと、操作にあたっての大事なあれこれを、太字や赤字にして家で書きまとめては、その都度それを母に見せながら教えた。でも母は教えたとをすぐに忘れてしまう。

「今やったばかりなのにほんとにわかんないよね。十回教えても、十回わかんないよね」

今日こそは優しく教えようと思うものの、あまりにわかんないといつ声を荒げてしまう。

しかし、九十一歳といえば世間では介護されてる人だっ

と声に出しながら打っていた。しかし何日も続けるうちにこう言った。

「あんたはまだ先があるけど、母さんはあとどれだけ生きられるかわかんないんだよ。指使いばかりに時間をかけてたら電話帳はいつになるかわかんないよ。何にも出来ないままで終わるかもしれないだから早く次に進みたい」

それもそうか。私だって最初はキーボードと画面に目を凝らしながら、一本の指で一文字ずつ打っていたのだと、母のやりたいようにさせた。

私がパソコン教室に通ったのは五十代半ばだった。長年勤めていた職場が閉店となり、ハローワークに行った際、求人欄はすべて「パソコンのできる方」となっていた。パソコンとは何なのかも知らず、また、それを習うなど考えたこともなかった私が、職に就くためにはと重い腰を上げたのだ。息子に「おかんは絶対無理！」と言われて不安をかかえての入学だったが、わかりやすく教えてくださった先生のおかげで一つ覚えるごとに学ぶのが楽しくなり、教室は二カ月半を経て終了した。その後、家でインター

するだけでもすごいこと、とはわかってはいる。しかし母のマウスの使い方は依然安定せず、矢印は画面いっぱい飛び交う。「ここをクリックして」と言っても「やってるんだけど、そこに行かないんだもの」と矢印はいつもフラフラ状態で、マウスは腕を伸ばして机のはじまで行ってしまふ。

私は、母は携帯のメールも私の特訓でちゃんと出来るようになったのだから、パソコンだってきつと大丈夫、と安易に考えていた。しかしそれは間違いだったのか。

ため息をつく私のそばで、母がセットした録音機のテープが回っている。「今日は怒られられないように頑張ろうと思っても、怒られるとパニックになって、頭に何も入らなくなるけど、寝床でゆっくりこのテープを聴くと、ああそうかとわかるからテープはとっておいた方がいいよ」と言う母の言葉にハッと我に返る。自分の冷たさと、母の我慢が、一気に押し寄せてくる。

夜、私の寝室から母の家の明かりが見える。まだ起きているんだ。今日もまた母を怒ってしまった。年老いた親が緊張しながら、子どもに気を使いながら、一生懸命頑張っているというのに私はなんなのだ。母は寝床でも、テープでまた私に怒られるのか……。母をかわいそうに思いながら、だったらなぜ優しく教えられないのかとまた後悔する。後悔をする度にあの時の依萌子さんの言葉が頭に浮かんで

くる。

それは、もう二十年以上も前のことなのだが、家の近くのホテルで、評論家の俵萌子さんの講演会があった。『親は先生にはなれない』と題しての講演で、俵さんが娘さんに勉強を教えたときのお話だった。

いくら教えてもわからない娘さんとそのうち喧嘩になり、書いては消し、書いては消しを繰り返す娘さんのノートが、とうとう破れてしまったそうだ。身振り手振りを交えての臨場感いっぱいのお話には、その情景がありありと浮かんで会場は大爆笑だった。そして講演の最後に、俵さんはこうおっしゃったのだった。

「親は先生にはなれない。子どもはちゃんと先生にお任せした方がいいとわかりました」

うちは親子、立場が逆だが、母さんも先生に教われれば怒られずにすんだのに……。ごめん、母さん。

こうして母のパソコン学習はひと月半が過ぎた。その日も母の家に行くと、机の上に印刷した電話帳が置いてあった。それは町内と町外の二列に分けられていて、郵便番号と住所・氏名・家の電話番号・携帯番号も入れ、見やすいように一行置きに色付けしたものだだった。

「母さん、出来たんですよ！ すごい！ すごいわね！」と私が言うのと、

「これも怒られたおかげです。なんぼでも怒ってください」

は多々、はてなマークはあるものの、まずは母の目標が達成されたことで、お互い、気持ちは一段落となったのである。そうしてほっとした日が続いたある日、母がしみじみ言った。

「今も時どき録音したテープを聞くけど、あんたが怒るの、わかるなーと思った。ほんとにこれだけ教えられてどうしてわかんないんだらうって自分でもつくづく思うもの。これなら教える方もいやになるのわかるなーって。年を取るっていうことは、これだけ覚えられなくなるっていうことなんだよね」

母の言葉がちよっと胸にツンときた。そうだ。年を取るということは、それまでちゃんと出来ていたことが出来なくなると、あたり前だったことがあたり前ではなくなると、こんなふうに、いろんな場面で悲しい思いをしなければならぬということなんだ。私にだってそう遠くはない、いつか、そんな日が来る。そのとき初めて、本当に母の気持ちが変わるんだ……。私には母の気持ちと少しでも早く通り過ぎるようにと、わざとそのことには触れず、さらに話を変えた。

今でもパソコンのことで母から呼び出しの電話が来るもの、その回数は以前よりぐんと減った。

母はニコニコ顔でルンルンした声で言った。

「昨日も遅くまで電気ついてたよね」

「やり出したらやめられないんだよね。この名前をこっちに移動した方がいいかな、色はこの方が良かったかなって、あれこれやっているうちにあつという間に時間が経つんだよね。ご飯食べるのを忘れてるときもあるんだわ。新聞読むのもたまっているのにこっちのほうが目白くて」

それから二、三日後の朝のことだった。九時過ぎに母の家に行くと、玄関は鍵がかかっていた。どうしたんだろう。いつもなら六時半には開いているのに。急いで家に戻り、母の家の合鍵を持って玄関の戸を開けた。カーテンは全部閉まったままで、母は布団の中だった。

えっ！ 一瞬、緊張した。そーっと指先で母のおでこを触った。あつたかい。鼻のそばに手を伸ばした。スーと寝息が伝わった。ああ、よかったー。

まずはぐっすり眠っていることに安心して、静かに戸を閉めて帰ってきた。

後で聞くと、夜、パソコンをやっている様子でもわからないところがあり、ずっとやっていたら午前三時になっていたそうだ。これは大変、寝不足で倒れたらと、それから眠剤を飲んで寝たので、目が覚めたときは十時だったという。

これまでの学習で母がどれだけパソコンを理解出来たか

母さん、これまでよく頑張りました。偉いです。二重まる、花まるです。念願の電話帳が出来て本当によかったよね。



齊藤はな絵
さいとう はなえ
1952 岩内町生まれ
2017より、「文芸思潮」エッセイ賞に応募
入選・佳作・奨励賞などを受賞

受賞の言葉

齊藤はな絵

優秀賞の通知をいただき、びっくりしました。選考委員の先生方、どうもありがとうございました。

この受賞はひとえに友人のおかげです。母にパソコンを教える際、何度教えてもわからない母を怒っては後悔し、それを繰り返す自分自身はなんと冷たい娘か、と彼女に話したところ、彼女は「私はそんな親子関係うらやましいよ。そういうのを書くといいよ」と言ってくれたのです。彼女の言葉があつて書くことができました。Kさん、ありがとうございます。

ドルジェよ、生きているか!?

西島雅博

ドルジェはチベット族の青年僧である。彼と初めて会ったのは、二十七年前、チベット第二の都市・シガツェのタシルンポ寺院であった。

今はどうかわからないけれど、当時は、どの寺でも観光客に開放的で、朝、夕に行われる勤行しんぎょうには自由に参加してもよかった。この日、私は夕方の勤めに参加させてもらい、後ろの方に鎮座して、その様子をスケッチした。休憩に入ると、少年僧が自分の頭よりも大きなヤカンを持って、ふらつきながらも順繰りに皆にバター茶をついでまわる。その格好が妙におかしかったが、私にもふるまってくれた。勤行が終わると、若い僧たちは、絵を描く私に興味津々で、近寄ってきた。彼らのひとりの肖像画を描くと、おれのものも描いてほしい、と喋りだした。たまたま何人かに囲まれた。絵のモデルになった若者が僧房の一つに案内してくれた。八畳ほどの部屋にはソファ兼用のベッドが二つあって、こざっぱりと整頓されていて、小さな仏壇にはダライ・ラマと高僧

の写真。ほかに小さなマンダラが飾ってあった。

バター茶をいいただき、おかわりをする。彼が部屋の隅から丸く長い筒のような容器を持ってきた。バター茶の攪拌器かくはんきで、中に水に溶かしたバターを入れ、長い棒で何度も突きはじめる。磚茶たんちやと塩が少しずつ入っている。やってみますか、という身振りをするので、私も棒で突いてみた。かっぱんかっぱんとにぎやかな音が響く。

ほかにも三、四人集まり、写真を撮ったり絵を描いたりした。彼らは中国語を少ししか話さず、私はチベット語を解さない。英語は全く通じないから挨拶程度の会話でしかなかったが、楽しいひと時だった。絵のモデルになった若者がドルジェだ。穏やかな表情ながら意志が強そうで、チベット人特有の頬骨が出ていて、鋭い眼光が印象的だった。

その翌年、今度は西のネパールの方からバスでシガツェに入ったのだが（前は東の成都から飛行機でラサに飛ん

だ）、町中は、前とちがって異様な雰囲気だった。通りに観光客はおろか住民もほとんど見当たらず、ひっそりとしているのである。宿も、個人旅行者は一カ所に指定されていて、しかも一泊だけに限られていた。寺院の入り口付近には中国の公安らしい私服の男がいた。これは、僧侶が外国人旅行者と接触することを監視していると思っただけで、迷惑をかけるはいけなないと、私はドルジェには会わず、持参した肖像画のコピーも写真も渡さずに、シガツェをあとにし、東の方のラサへと向かったのだ。

噂で知ってはいたが、この時、パンチェン・ラマ十世の生まれ変わりだと認定されたニマ少年が、寺院での法要の最

中に、家族とともに中国当局によって拉致されたのである。これを阻止しようとした僧が二人殺されたという。

チベット仏教では、ダライ・ラマは観音菩薩、パンチェン・ラマは阿彌陀如来の化身とされている。穢土たんどの人々を救うために何代も生まれ変わると信じられ、民衆から熱烈に支持されてきた。両者は世俗世界の統治者でもあるため、先代以前から、チベットでの権力行使で互いに対立を繰り返している。

パンチェン・ラマ十世は、一九五二年に人民解放軍とともにチベットに入り、貫主かんしゅであるシガツェのタシルンポ寺に住んだ。はじめの頃は中国寄りの姿勢であったが、やがて中国政府のチベット政策に不満と疑念をいだき、公の場で政府を批判したため、反人民、反社会主義の烙印を押されて投獄され、しばらく幽閉生活が続くのである。八九年、パンチェン・ラマ十世はチベットへ帰ることを許されるが、まもなく、タシルンポ寺で示寂する。五十二歳だった。だが、チベット人の多くは、これを毒殺だと信じている。

その後、ダライ・ラマ十四世によって、六歳のニマ少年が転生靈童と認定された。しかし中国政府はこれを認めず、に拉致し、代わりに共産党幹部の子のノルブという少年を十一世と選出した。宗教を否定する政府が高僧の生まれ変わりを決めたのである。

この頃、ラサの町には、中国人の住居コロニーがあり、



ドルジェの横顔 1994年8月筆者撮影



タシルンボ寺。94年に訪れたときのスケッチ



功徳を積むためパルコルをめぐる巡礼者たち。パルコルとはラサの中心寺院・ジョカン寺の外周を循環する巡礼路をいう。

人民解放軍の無数のトラックが列をなして郊外へ向うのを目撃し、不気味な感じがした。文化のちがう異民族の軍隊が、堂々と仏土を侵していく光景に思えたからである。各地に軍人たちの猛々しい姿が見られたが、かつて中国を侵略した日本軍も、このようであったかと想像したものである。被侵略国であった中国の、わずか数十年後の変わりように驚いたのだ。地方の寺で、私は若い僧から手製の旗を見せられた。赤い太陽と放射線、それに一對のスノーライオンの描かれた「チベット国旗」だった。Erde Tibetと文字も入っている。一介の外国人旅行者に、そんなことをする大胆さに驚いたが、それだけ、彼にとって は切実な訴えだったのだろう。

一九四九年十月、中華人民共和国が成立すると、まもなく中国軍は「外国の帝国主義者から解放する」との名目で東チベットに侵攻する。それまでチベットは、一度も外国の統治下にあったことはなかった。その後、中国に味方する裏切者を利用して、「十七カ条協定」をチベット側に強引に認めさせ、「中華人民共和国の大家庭」へとチベットを編入、支配していく。それでも中国側は、はじめの頃は、彼らの民族としての尊厳を傷つけないように気をつかった。だが、チベット仏教に対する無理解と漢族優越主義の横行で双方の対立は深まっていく。五六年になると、「民主改

革」が始まって、「人民公社政策」が実施され、急速にチベットの伝統文化が破壊される。五九年ラサでの蜂起と鎮圧。ダライ・ラマのインド亡命、多くのチベット人の離散。文化大革命の宗教大弾圧による壊滅的破壊と決定的亀裂。

その後、何度も繰り返される「独立」を求めるデモ。チベットを離れ、ダライ・ラマのいるインドのダラムサラへと亡命する僧たち。教育の現場でチベット語を話すことを禁止され、中国共産党への忠誠を誓わされる「愛国再教育」政策に反対し、就学難民として子供をインドのチベット人学校へ送り出す多くの親たち。

中国政府は、チベットへの中国人の組織的な移住を、税制優遇などのさまざまな特典を与えて、強力に推し進めた。彼らはチベット人の職や土地を奪って、チベットのいくつもの町をチャイナタウンに変えていく。チベットでチベット人はもはや少数民族になり、仏教の伝統は消滅の危機にあるとさえいわれている。

チベットの主たる産業は農業と牧畜である。

元来、チベット遊牧民は、寛容で信仰心に篤く、寺院への寄進を怠らずに、季節ごとの宗教行事に参加し、文化的イベントも行ってきた。ところが、二〇〇〇年から江沢民主導の「西部大開発」政策による鉱山開発やインフラ整備、都市計画が始まった。彼らは草原から定住地に強制的

に移住させられ、ヤク、牛、羊などの家畜を手放さざるを得なくなり、それまでの伝統的で安定した自給自足の生活形態が根底から覆され、貧困に追いやられてしまった。その数、一〇〇万という。その上、かつては認められていた精神的なよりどころであるダライ・ラマに対する信仰が、九〇年代の後半になると禁止されていて、写真を持つただけで、処罰されるようになった。「民族分断」「国家反逆」の温床になるとの中国政府の方針によるのだ。

古来から信仰の対象であった神山山々が次々と削られ、鉱物資源となって内地に運ばれていく光景は、チベット人にとって身が引き裂かれるようであろう。アイデンティティーが否定される暴挙以外の何ものでもありません。

北京オリンピックを前にした二〇〇八年三月、「自由」と「民

族平等」を掲げたチベットでの大規模な抗議行動では、武装警官隊による鎮圧で、多数の死者が出ている。さらに二〇〇九年九月には、チベット人による初の抗議の焼身が行われた。ガソリンをかぶり、炎に包まれ、その身を「灯明」と化して、圧政による激しい弾圧からの解放を訴えたのだ。二〇一九年十一月までに一六〇人を超えているというから、二〇二一年八月の現在では二〇〇人に近いのではないか。大部分が僧侶だが、なかには若い尼僧や母親、一般の人たちもいる。

彼らは、皆、最後に「チベットに宗教の自由を!」「ダライ・ラマ法王に長寿を!」「法王のチベット帰還を!」と叫ぶのだ。

このような非暴力の暗澹たる惨事が一体いつまで続くのか。二〇一二年十月、チベット自治区ナクチュで、焼身抗議して死亡した作家グドゥップ(四三)は、「命により打ち鳴らされた国家(チベット)の太鼓の音」と題された次のような遺書を残した。

「苦業と業を共にする雪山の人々(チベット人)の目標は、完全な独立を達成し、ダライ・ラマ法王をチベットにお招きすることである。しかし、法王は非暴力による中道路線を提唱され、名実ともに自治獲得に努力されている。そして六〇〇万チベット人は、この法王のお言葉を頭上に掲げ、長い間、希望を共にしてきた。

だが中国政府は、この提案に興味を示し賛同するどころか、チベット人の福祉を語るだけでも、その者を逮捕し、非情な拷問を加えた。ダライ・ラマ法王を非難せず、チベットが中国の一部であると認めない者を投獄し殺害する。チベット人の幸福には全く興味を示さず、本当のことを隠し続けているのだ。

我々は非暴力の闘いをさらに研ぎすまし、チベットの真の実情を知らしめ、証拠を示すために、自らの身を火に捧げ、チベット独立を叫ぶ。天におられる神々よ、チベットをご照覧あれ、母なる大地よ、慈愛のなかでチベットを見守られよ。地上にある世界のすべての人々よ、誠の真実に注目していただきたい。

清らかであった雪の国は赤い血に染まり、非情な軍隊により踏みじられ、絶え間ない弾圧を受けている。しかし、勇敢にして挫けることのない雪の子供たちは、智慧の弓を引き、命の矢を放って、真実の闘いに勝利するであろう。

最後に、雪山の同胞たちよ、自由と平等の権利を享受するために、個人的な利害を捨て、チベット全体の団結を強めてほしい。これが私の願いである」

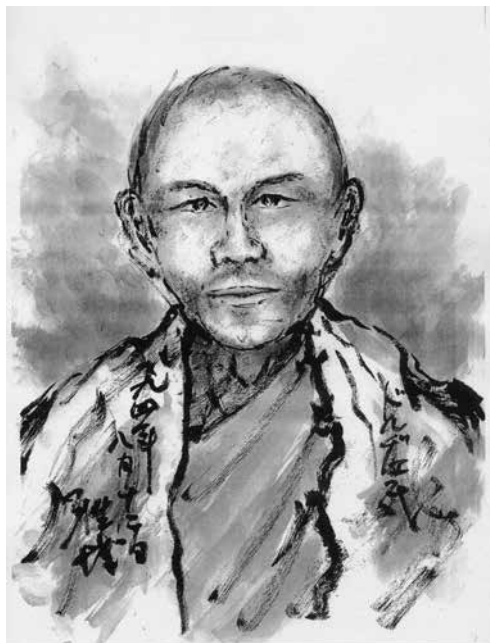
チベット人は長い年月をかけ、過酷な自然のなかで独特な文化を育んできた。

宗教を「毒」「悪」と決めつけ、物質的、経済的發展に

しか価値を認めない中国共産党は、武力でこの豊潤なヒマラヤの文化をスタスタに切り裂いている。寺院などの宗教施設は観光資源として利用したり、産業の生産工場に変え、僧たちを労働に従事させたりしているのだ。

ラマ教といわれ淫祀邪教のように考えられていたチベット仏教が、実は正統的な大乘仏教の流れをくむことが明らかになった。唯物的で効率的な技術至上主義的価値観がはびこるなかで、人類共通の原初的な魂の世界を開示しているのである。

心理学者ユングも絶賛する「チベット死者の書」(バル



ド・トル)は、単なる死者の葬送儀礼の書ではなく、古い時代につむぎ出された經典であると同時に民族の叡智の結晶であり、精神や意識・魂を解き明かす人類の宝なのだ。アメリカでの「ダイイング・プロジェクト(死への計画)」やホスピスの医療現場などで「チベット死者の書」が活用されている。

屹立するラサのポタラ宮や多くのマンダラ、さらにギャンツェの白居寺の境内に建つ大塔(バンコル・チョルテン)の内部に啓示された夥しい数の仏尊の画像などは、仏教芸術の最高傑作といってもいいだろう。

ドルジェと会ってから、長い年月が流れた。彼は、今、どうしているだろう。生きていますか、死んでいるのか。生きていますとしたら五十歳ぐらいになっているはずだ。寺院から強制的に「労働改造所」へと送られ、修行を中断、還俗させられたらどうか。だが、ドルジェとは、金剛の意で、仏道修行者の堅固な意志をいう。彼が篤い信仰を持ちつづけているとしたら、チベットで生き抜くことは困難だろうから、ヒマラヤを越え、インドの亡命政府のもとに逃れて、仏教復興への情熱を燃やしているかもしれない。そうであることを願いつつ、かつてタシルンポ寺院で描いた肖像画と写真を見ながら、私は彼を偲んでいるのである。

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立90年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館 5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

http://www.bungeika.or.jp/



西島雅博

にしじま まさひろ

1945 旧満州・新京（現・長春）に生まれる

72 早稲田大学文学部卒

78 独学で絵を描き始め、79年以後、ヨーロッパやアジア、中近東、アフリカの国々20数カ国を歴訪

2007 「鳥葬」で第29回吉野せい賞を受賞

福島県立小名浜高校創立100周年記念歌「FOR EVER」作詞（作曲・長瀬清正）

個展多数、元日本表現派同人

著書に画文集「雲南の果てに」「シーサンパンナへの旅」「チベット・ラダック墨画紀行」墨彩画集「いわき」、小説「蒼天の風—天田愚庵の生涯—」など

参考文献

「原典訳チベットの死者の書」川崎信定訳 筑摩書房
 「チベットの焼身抗議」中原一博 集広舎
 「パンと牢獄」小川真利枝 集英社
 「チベット・ラダック墨画紀行」西島雅博 西田書店

受賞の言葉

西島雅博

苛烈な自然を生き抜くために、信仰一筋に貴重な文化遺産をつないできたヒマラヤの民が、それ故に、理不尽な圧政を受け迫害されている。

インドに逃れた多くのチベット人は、慣れない環境と風土のなかでも民族としての誇りを堅持しつつ、法王の帰還を望んで、故国を偲び、信仰を糧として苦闘しているのだ。中国での新疆ウイグル人の人権弾圧が国際的に報じられ、収容所内の彼らの姿がテレビに映ることがある。だが、チベットに関しては、中国政府の「国内問題」との主張により、あまりニュースになることがない。人権より経済を優先する日本政府も、この問題について触れることはない。賞に選ばれたことはうれしいが、武器を持たない彼らは、今もなお、民族の存亡をかけ、血の涙を流し、自身に火を放つて、世界に訴えているのだ。その心情に思いをはせるとき、素直によるこんではいられないのである。

これを機に多くの方々にはチベットの現状とその悲劇を知っていただけたら、と思う。

「死ぬことを学ぶことによって、あなたは生きること学ばず、死ぬことになるだろう。」

死ぬことを学ばなかったものは、生きること何も学ばずに、死ぬことになるだろう」

「チベット死者の書」

翡翠



菊見洋介

三十歳、夏。夜逃げをした。妻の元からである。半年間の結婚生活だった。恋人時代の妻は、婚姻届を出すと同時に消え去り、顔が同じだけの、理屈も常識も通用しない異世界人のような女と二人、一つの家に残り残された。

妻は、私が拾う目の前でティッシュやペットボトルを床に投げ捨て、トイレに入れば大便を水で流さずに放置し、中身が残ったままの缶や瓶を捨てるせいでゴミ箱に虫を湧かせた。それらの改善を求めれば、逆上して殴られた。こうした話を聞いた義母が娘を叱ることはなかった。反対に、私を女性に家事を押し付けるモラハラ夫だと決めつけた。掃除も、洗濯も、洗い物もさせない、風呂もトイレも洗わせたことはない。料理を作ってくれと頼んだこともない。ただ、自分の出したゴミを捨てることを、用を足した後に水を流すことを頼むのがモラハラなのかと問い返せば「当たり前だろう」と怒鳴られた。

夜逃げをする二日前に、私は妻のゴミを拾うことを拒ん

家には最初から正解など存在しなかったのだと、ようやく悟った。

どうやって一一〇番して、何と言って助けを求めたのかは覚えていない。ただ、あと一分、警官の到着が遅かったなら、私の気は狂っていたのでないかと、今でも思う。

夜逃げをしたのはその晩だった。

警察署を出た妻が、身元引受人となった友人の家に泊まっている間に、両親と三人で荷物をまとめ、実家との間で車を二往復して逃げ延びた。実家の鍵をかけた途端、三人で肩を寄せあい、安堵の下に泣いた。そして、一睡もすることなく弁護士を雇いに行った。

弁護士を通してなお、妻の破綻ぶりは留まるところを知らなかった。離婚に合意したかと思えば、翌日には前言撤回の連絡が届き、それと時を同じくしてSNSでは離婚願望を語っていた。ようやく、返答があったのは夜逃げから一か月以上経ってからだった。

書面には、稚拙で際限のない虚言——妻は日ごろから私から、モラルハラスメントやDVを受けていた、自殺未遂は夫である私への恐怖から逃れるためだった、義母は、私に「お前」と呼ばれたことがショックで精神病棟に入院した等——を理由に慰謝料三百万円を支払うように記載されていた。

——水山の一角。妻の邪悪さを知ったつもりの、暢気な

だ。それが気に食わないとして、別居を言い渡された。「家事を押し付けるな。別居しないならモラハラで訴える」と叫びながら妻は私を殴った。信じられないような理不尽に心が硬直して、馬鹿みたいに黙ったまま、ただただ背中を、腹を、頭を、目を、口を殴られた。痛みを耐え兼ね、妻の拳を掴んで抑えた。押し問答の末に私は自室へ逃げ込み、鍵をかけた。扉の向こうから妻の罵声が聞こえた。心の胸倉をつかまれて、揺さぶられるみたいだった。

その翌日にも、妻に家を出て行けと言われた。逆らう意味も見出せず、言われたとおりに出て行こうとしたら、今度は「出て行くな」と殴られた。破綻していると思った。必死に、最低限の荷物をまとめ、出て行こうとした。服を引つ張られ、袖の部分が伸びた。首にミミズ腫れが出来た。それでも家を出るのが正解だと信じて、動きを止めなかった。業を煮やした妻はUターンして台所へ走った。そして、私が玄関に手を掛けた瞬間、包丁を腹に当て「出て行くなから死んでやる」と勝ち誇る妻がゆっくり姿を現した。この

自分を嘲笑うように、その言葉だけが麻痺した脳裏に蝸居を巻いていた。

「三百万円は、相場からすればありえない話ですが、一方でその金額を払ってでも縁を切った方がいい相手という見方もできます」

弁護士は重苦しく語った。

不眠と頭痛、ストレス性の不整脈が生じたのは、この頃からだった。

何をしていても、妻の言葉が嘘だと証明する方法ばかり考える日が続いた。そうした中で、妻の留守を見計らって自宅に戻ったことがある。夜逃げの際、泣く泣く置いてきた家具を取りに行くのと、虚言の反証探しの為である。一月半ぶりの家の荒み様は酷かった。ゴミ箱はひっくり返って中身が床におちまかれており、洗濯機の中ではカビの生えた下着が異臭を放ち、冷房をつけたまま窓が全開になっていた。なるべく部屋を荒らさないように考えていたのがアホらしい。そう思った時、手に触れたのが、妻のパソコンだった。

うる覚えの記憶を手繰り寄せてパスワードを解除し、妻と相手方弁護士の連絡内容を追った。緊張のあまり、吐きそうだった。そうした探索を十分ほど行い、自殺未遂をした日についての文章を見つけた。そこには事実とかけ離れた嘘——男が女性に持ち出されることを一番恐れる類の

——が記されていた。

気が付くと、私は部屋の真ん中で嘔吐していた。胃液が口からこぼれていった。

哀れだと思った。妻に私を悪人に仕立て上げるための嘘を吐かれたことが、ではない。嘔吐するまで追い詰められてなお、食べ物一つも出てこない、吐瀉物すらみじめな自分が哀れだった。

ひとしきり吐いたところで顔を上げ、叫んだ。殺してやる。自分の咆哮に窓ガラスが揺れていた。本当に妻を殺そうと思った。シャツの袖が赤く染まっていた。怒りで鼻血を吹いていることにも気が付かなかった。

あの時、帰りを心配した母が電話をよこさなかったら、私はどうなっていただろう。

パソコンの内容を伝えられた母は絶句し、いくらであろうと金を払って離縁すべきだと言った。私は、嫌だ、殺させてくれ、殺さなくてはならないと泣き喚いた。電話の向こうで母も泣いていた。それこそ、人生が強姦されたようだと感じた。

結局、日付が変わるまで待ち伏せたが、妻は帰ってこなかった。洗濯物の様子などを見ていると、もうこの家に妻が住んでいないと察せられた。殺すこともできないと悟った。

叶わない衝動を抑えるためには矛先をそらす必要があった。

ある日、弟が私を心配して、実家に戻ってきた。弟は私をファミレスに誘い、洋梨のパフェを二人分頼んだ。弟は頼んだパフェにも手を付けず、夜逃げ以降の詳細を聞いて涙を流していた。その目の前で、私は、自分のために泣いてくれる弟の優しさよりも、パフェのことばかりを考えていた。何故、弟が一生懸命働いたお金で、私なんかパフェを食わせてくれるのか、納得できなかった。美味しくて、甘くて、私なんかより、両親が食べるべき物だと思った。この世の何もかもが自分には不相応で、居場所がないと思っただ。

生き方が分からなくなっていた。妻の虚言に屈して慰謝料を払うことも、このまま婚姻関係に囚われることも、調停や裁判の戦いに身を投じて長く心身が消耗していくことも、私が自殺して家族が苦しみを負うことも、何もかも許せなかった。ただただ、停滞していたかった。指一本も動かさずに消滅してしまいたかった。

年が明けても離婚協議に解決の気配はなかった。弁護士からは凡そ三か月が目途の離婚協議に既に半年かかっていると、契約終了の方向を示し始めた。妻のSNSは過去の一途を辿り、過去の発言との矛盾にも気づかぬ者達から、賞賛を浴びていた。

怒りにも自己嫌悪にも疲れ果てて、何もかもどうでもいと感じた。

た。

手が届く中で、最も罪深いのは自分だった。そもそも私が妻と結婚したことが全ての始まりなのだ。深夜一時を過ぎて帰ると、目を腫らした両親が寝ずに待っていた。何も悪くなく、善良に生きてきた両親だった。自分のせいでも——自分が妻と結婚するほど愚かしく、膨れ続ける怒りを抑えられないせいで——両親を泣かせていると思った。

親を泣かせている自分から目を背けようと妻を憎んでも、結局、そんな女と結婚した己の不甲斐なさに責任が帰結した。自己嫌悪の渦に飲まれた。毎日悩んで、己に呪詛の言葉を吐き続けた。それほど悩むなら金を払って妻との関係に決着をつければ良いと考えるものの、精神的にも経済的にもそれを受け難い自分がいた。そして、そういう自己都合によつて家族の心を痛めている事実が、さらなる自己嫌悪を招くのだった。妻への怒りに燃えたかと思えば、自己嫌悪に溺れ出す。そんな危うい精神状態を繰り返す私の傍で両親がさらに疲弊していき、それこそが最も耐え難いと嘆きながらも、在り方を変えられない己の弱さに絶望した。

笑うことも喜ぶことも、他人を苦しめている自分にそんな資格はないと思うようになった。日常は罪悪感の種ばかりで、それらは簡単に芽吹くのだった。

死のうと考えた。そして怖気づいた。

かわせみ 翡翠を見たのは、そんな頃だった。

正月七日、家族三人で初詣に出かけたときのことだった。新型ウイルスの感染症を忌避しての、少し遅れた初詣だった。出不精の身体を動かさずと、遠回りになる、普段通らない川沿いの道を選んだ。堤防に沿って歩いていると、ゴミの浮かぶ川に一羽の翡翠を見つけた。

立ち止まり、三人で枝に留まる翡翠を眺めた。翡翠は、身じろぎの一つもしないで、その姿を晒し続けた。周囲に人はいなかった。私たちだけに見せたその美しい彩りは、久方ぶりの、逆流せずを受け止められる幸せだった。

何より、ゴミの浮かぶ中から、あの美しい鳥を見つけた自分が嬉しかった。その美しい姿を、どうにか自分の生きる希望に結び付けようとしている自分がいた。心が生きる力を得ようともがいていることに気付いた。

どれくらいそうしていたらだろうか。不意に翡翠は、羽根を広げ、内翼の瑠璃を光らせて飛び立った。私たちは、ゴミだけになった川を名残惜しく見つめてから手をつないだ。

「良い物を見て幸せじゃないか」と母が言った。「三人で手をつないで歩くなんて、楽しいな。いつぶりだ」と父が語った。「そうだね、幸せで楽しいね」という言葉が、自分の口から自然とこぼれた。

二人が強く手を握ってくれた。

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!

八覚正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文学界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)

「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩	小説
1篇 A4用紙2枚以内 3000円	1篇 20枚まで 7000円
エッセイ	50枚まで 10000円
1篇 5枚以内 4000円	100枚まで 15000円
10枚以内 5000円	200枚まで 20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

bungeisc@asiawave.co.jp

小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

小説の書き方

——作家を志す人のために——

五十嵐 勉

税込 1000円 御注文はアジア文化社まで

この度は優秀賞にご選出頂き、誠にありがとうございます。「翡翠」は、昨年、私の身に起きた元妻との出来事を記録するために書きました。それ故、赤裸々に綴った内容は非常に重苦しいものとなりました。そんな文章ながら、今回、賞に選出頂き、様々な方に目を向けて頂ける機会を得たことで、あの日の心の叫びに出口が与えられたような気がしています。あらためて、選考に携われた先生方と、支えてくれた家族・友人にお礼を申し上げます。

受賞の言葉

菊見洋介



菊見洋介
きくみ ようすけ
1990 山形県に生まれる
2013 早稲田大学卒業
同年 東京都内の出版社に就職

この時間が続けばいいと思えた。続けるために、自分に来ることを考えようと思った。到着した神社で、三人並んで手を合わせた。父と母と私と同じ幸せを願っていれば良いと思った。

広告承ります

文芸思潮の読者に 文学愛好者に
知らせたい情報を掲載します

広告掲載料 文芸思潮●発行部数 1000部

1P	4万円	
1 / 2P	2万円	
1 / 4P	1万円	1 / 6P 7000円
表4カラー	12万円	
表2・表4	8万円	

その他御相談に応じます。ご連絡ください。

文芸思潮広告部 ☎ 03-5706-7847 mail: bungeisc@asiawave.co.jp

ウイグル人の証言をきいて

山田まさ子

三月二十日枚方市の公民館で、ウイグル人の証言を聞くという人たちが集まって行列をなしていた。なかなかこの行列が進まないために階段や廊下に立ったまま誰彼となく話をしていた。私の前にいた青年がこんなに人が集まっているのはおかしい、さっき聞いたら自民党が招集をかけたというからそれで来ているんでしょう。別の男性が多かったのに立ち止まる人はいなかった。あちこちで集めたけれど、みんなウイグルと聞いても振り向いてもくれなかったんですよ。今こんなに集まっているのはおかしいですからね。やっぱり招集をかけたせいでしょう。

長い間行列が止まっているのはどうしてでしょうね、全く進まないじゃないですか、階段や廊下に人がいて。

皆いらだたしげに囁き合っていた。行列が前の方に進んでやっと事態がわかった。一人一人に名前や住所を書かせてから部屋の中に入れていたのだ。主催者がこう呼び

かけていた。中国政府が監視をしているかもしれません。今皆さんの中にもスパイがいるかもしれません。写真も録音もだめです。

注意は何度も行われ、ウイグル人が登壇する前、司会者が叫んだ。さっき録音をしようとした人を見つけたんですよ。皆さん、今から全員両手を挙げて下さい、スマホを持った手を見せて。はいそのまま、スマホを机の上を下ろして。既に百人収容の集会場はいっぱいになり、別の会場も満席で吹きこぼれた人たちが立っていた。私も立ち組の一人、近くの人の台にスマホを置かせて貰った。

はい誰もスマホは作動してませんね。主催者は見て回り、さらに確認した。

四人のウイグル人たちはそれぞれ失った家族や友人の写真をスライドで見せてくれながら語ってくれた。

黒板の前に立つ若い女性の写真が映し出された。話者の友人だという。彼女は日本の学校で先生となっていたが、

父親が中国政府に拘束され消息不明となった。丸二年悩んだあげく、ウイグルに父を探しに戻り、帰らぬ人となった。

この体験と対照的だったのは、ある青年の話だった。日本で働く彼はウイグルに暮らす母と Weibo で通信していた。ある時中国管理局が、母のアカウントを使って帰ってくるように通告してきた。帰れば収容所に入れられてしまう。長ければ十六年収容所暮らしとなり、命の保証はない。鎖で足を縛られ、毎日毎日自己民族否定の言葉を声に出して復唱せねばならない。中国を讃える歌を歌い、声が細ければ怒鳴られる。死体になっても戻れるかどうかはわからない。遺族に顔もみせないまま焼かれてしまったり、連絡

すらないこともある。戻された遺体も顔を見せて貰えるだけで、決して全身には触れさせて貰えない。戻ってくれという母の言葉を読みながら青年は迷った。

次に通信があった時、帰らねば親兄弟親戚も収容する、みんなのために戻れとあった。彼は戻らぬ道を選んだ。

毎日苦しいです。僕だけが日本に来て助かった。連絡したら迷惑がかかるから、もうウイグルの母にも友人にも誰にも聞けない。母がどうなったかわからない。僕だけが助かり、他の人が収容所に……助かったことが苦しい。

ウイグル人の強制収容者数は多くの報道で一〇〇万人以上とされている。アメリカやカナダはジェノサイドとし、日本は二〇二一年現在、それは認定していない。証言によると収容所に入れられるのは海外に行ったことのある親族のいる人などでAIが判定している。何年も労働し戻ってきて、説明なく再び収容される。

収容所で行われる教育を私たちは写真で見たが足を鎖で縛られていて、洋服作りや電化製品の部品などの強制労働をさせられている。中国共産党を讃える歌を毎日歌わされること、声出して自己否定すること自分たちの民族を否定し、中国政府を讃えること、その生々しい録音も会場で少し流れた。陰鬱な歌声が壁に響き、看守の怒声が混じった。強制労働の話聞いた時、私はアパルトヘイトのことを

ウイグル人の証言をきいて



体験誌女性の女性で配布された場でインターネット上で無料で読むことができる

思い出した。ウイグル人の労働で安価な品を作る日本企業もある。電化部品や衣服などだ。ユニクロやしまむらのシャツを安すぎておかしいと思いつつ私は買ってしまった。三〇〇円のシャツには中国製と記されていたが、あれはウイグル人の作ったものではなかったのか。かつてアバルトヘイトの時、私たちは知らずに安い電化製品を買っていたが、それと同じことを繰り返しているのではないだろうか。中国政府が「初心を忘れず、使命を心に刻む」と表札に記した施設の中で「愛国愛党」「再教育」としておこなわれる労働を私たちは見ないふりをする。

こわばった顔つきで整列した家族集合写真には、寝泊まりしている三人の監視人が笑顔で写っていた。背後の農家の屋敷には監視カメラがあった。

昔の写真は生き生きとしていた。民謡でも歌いそうなおじいさんが陽焼けした顔をくしゃくしゃにして笑っている。その眼の屈託のない信頼しきった輝き、この人はもう帰らない。

教室に子供たちがきちんと整って並んだ写真があった。青い制服も結んだスカートも一糸の乱れもない。親は収容所に送られ、子供たちは宿舍で管理されて育てられる。その子供たちは中国の小さな兵士の格好をさせられている。青い身ぎれいな兵隊さんの洋服なのだ。この子供たちの誰も多彩な色を織り込んだウイグルの民族衣装を知らない。

私はウイグル人の詩を思い出した。グリニサ・イミン・ギユルハン「父の麦畑と兄のホータン玉」（ムカイダンス訳）「ウイグル ジェノサイド」ハート出版から」である。

如月の頃

父の麦が熟し

杏が地に落ちた

それを見ながら

気づかれずに通る時を見ながら

七人の心が締め付けられた

咲き誇るタマリスクの樹が

父のように曲がった

父に逢えなくなって頭が下がった

父がそれらに逢いたくなくなったように（後略）

ウイグル人の証言を聞いた帰り道、私は裏道を通っている時に、薪割り小屋の間から野良猫が二匹上に首を重ねるようにして出しているのを見た。小さな頭がふたつ覗いているが野良らしいのにもかかわらず、逃げ出そうとしないのはまだ人を知らない子猫だからだろうか。私は猫の邪魔にならないように、少し離れた所に立った。右手に大根畑があった畑の方から素早い動きで雉虎猫がやってきた。母猫と知ったのは少し後のことである。その時は畑から大き



ウイグル協会による子供たちの写真

く精悍な猫が近づくことしかわからなかった。雉虎は歩みを止め、大根の葉影の間からきつと私を睨んだ。金色の眼に凄みがあった。私は警戒されてるなと思って、少し後ろに下がった。

猫はブロック塀に飛び上がり、そうすると何の迷いもなくまっしぐらに薪割り小屋の方に走っていった。

ふたつの頭が小屋の戸からさらに突き出された。そのアイモンド色の眼が見開き輝き、毛糸玉のように転がり出た。桃色の小さな口に覆い被さるお母さん猫の口が重なった。何か啜くもえてきた物を押し込んだ。すると必死に小さい口がしがみつく。お母さんは目をつぶって食べ物をお口移ししている。

私の方からは母猫の体格のよい姿に隠れてしまった。ぶらさがるように擦り寄っている。それから三匹の親子は小屋の中に消えていった。私はこんなに感動的な猫の餌やりを初めて眼にした。お母さん猫は大きな体はそのままだが鋭い眼つきをしていた時とは打って変わって、眼をつむりやさしい動きをしている。

彼らは影絵のようにただの一声も発さなかった。飼猫であるならば、必ずここではニャーニャーと声をたてて母猫は子猫を呼ぶし、子の方もミャアミャアと鳴き立てる。だがこの子供たちは違っていた。母は無言で子のもとに飛んで行ったし、子らも揃ってつつましくその身を心得ていて

黙ったまましがみつくと。一家はたとえ一声でも発すれば人間につかまってしまうという身の程を知っていたのである。母猫がもしも飼い猫であったとしても、人の家を出産すれば子は他にやられてしまう。だからこんな薪割り小屋の片隅で育て、鳴かないことを教え込む。

すくっと大地に立った母のぬくい体温、毛並み、そうかあの子たちが私の姿に逃げなかつたのは子猫だからではなく、強くてたくましいお母さんが畑の所にいてくれたから、そばにいて守ってくれるから。あの子たちは食べ物だけではなく、毛先までいきわたる安心を貰っている。むろん皆が皆こんな優れた母猫ばかりではない。雀にも馬鹿にされるくらい運動神経の鈍い、よれた毛並みの足も眼も悪い猫もいるかもしれない。だが全員お母さんなのだ。

ざらっとした母の舌、魚やミルクや陽なたの立ち込めるにおい、包み込んでくれるやわらかさ。もしも失ったとしてもその記憶は残るだろう。私は自分の母親が初めて西洋風の洒落たカフェに行った時、コーヒーと一緒に出された袋入りの角砂糖を菓子と思って齧り、美味しいと言った。教養なき親子のどうでもよいような記憶。だがもう手に入らない時の想い出としてよみがえるとき、私は感謝せずにはいられない。しあわせに思う。

あの写真に兵士服で整然と並んだウイグルの子供たちについて。私を身ごもった時、母は誰にも知られまいと四国から東京に移り住んだ。

出自の知られぬ東京は母には安心して産む事のできる、雑猫にとっての薪割り小屋のようなものであった。だから私は自分の背後に生まれることのできなかつた「強制不妊」の子供たちの姿を感じる。素性が知られず「違法」のもとに私は生まれることが出来た。生まれるすべを失った子たちのことを考えずにはいられない。「不妊手術」の子供たちは決して架空の存在ではない。手術がなければ宿った命である。

ウイグルの子たちは母を知らない。産まれなかつた子らは手術室で流す母の涙をも知らない。



は母のいた記憶がない。あの子たちは母親を知らない。なぜ引き離されたかも知らなければ、自分たちがどんな衣装を着てどんなふう踊り歌った民族であるかも知らない。いろいろで歌う子守唄も聞いたことがなく、親が叱ってくれることもない。

宿舎の中の無機質な政府の統制だけで、あの子たちは年を重ねていく。母親がなにを伝えようとしたかも知らない。ウイグルの詩に歌われている中には、失われた父の面影があつた。兄やたわいな麦の香りもあつた。だがあの子たちには、失う面影すらない。最初からなにひとつ。

そしてウイグルには、いのちに辿り着くことが出来なかつた子たちがいる。ウイグル人の女性に「強制不妊手術」が行われている。

「強制不妊手術」はかつて日本でもあつた。ハンセン病や障害者の患者に戦後は優生保護法（一九四八〜九六）に基づいて行われていた。

私が中学生の時、先生が「精神病の親族のいるものは手を挙げて。うん、君はそういう遺伝やから将来結婚しちゃいかんね」と言っていた。正直に手を挙げた女の子は俯いていた。私は手を挙げなかつたが、私の母は娘の頃精神病院に二年入院させられていた。祖父が母を背負い医師の制止を振り切つて病院から出した。不妊手術は国の政策であ



山田まさ子
 やまだ まさこ
 1957年4月生まれ高知育ち
 法政大学通信教育部日本文学科卒
 ワクチン投与後に千葉の一人暮らし友人を亡くし、警察から遺体確認の電話があつた。松山の笠陽一郎医師はブログに「悲しい便り」（8月2日）として載せてくれた。

受賞の言葉

山田まさ子

選考委員の先生方、編集の皆様、お世話いただきました。ありがとうございます。

掲載が決まって、ほっといたしております。

ウイグル人証言集会当日は政治家の挨拶のために最後の一人のウイグル人の証言がカットされてしまいました。わずかな20秒の間にそのウイグル人は叫びました。「皆さんこのことだけは聞いてください。まず教育者、知識人から引つ張られて行つたんです」

この一言をお伝えできたこと望外の喜びです。本当にありがとうございます。

元安川の石

田中美晴

季節は夏だった。

勤務している職場の美術科の同僚から、京都で開催されている二科展の入場券をもらった。そこで、気晴らしにでもと京都市立美術館へ出かけた。

順次作品を見ていた時、ある一枚の絵の前で、愕然としてしまった。私の足を釘付けにした絵のタイトルには、こう書かれていた。

『元安川の石 故竹本三郎』

元安川って広島のこと、あの原爆ドームのそばを流れる川のことだろうか。竹本三郎って、あの美術の竹本先生なのだろうか。

私はすぐ、作品目録のページを繰ってみる。まちがいない。私を知っている「竹本先生」その人だった……。

絵との出会いがあまりにも衝撃的で、その場を離れることができなかった。四十年以上を過ぎて遭遇する、その偶然に動揺して足が運ばない。

じっと絵の前にたたずみ、絵を凝視しながら、竹本先生と過ごした日々が、しだいに記憶の底からよみがえって鮮

行く先は屋上だけではない。

先生は時々、授業を二時間に工面して、学校から徒歩で十五分位の平和公園に、私たちをつれて行った。そこから元安川をはさんで原爆ドームが見える。

その公園で先生は、生徒に好きな場所で、自由に絵を描かせてくれた。私たちが嬉しかったのは、クレヨンで絵を描き終わると、時間まで遊ばせてくれることだ。

原爆ドームを目の前にしても、私たちに悲惨さはない。鬼ごっこや、かくれんぼをして公園内を駆け回った。そんな生徒たちに目を配りながらも、竹本先生は不思議な行動をするのだった。

公園へ行く時、天気がいいのに先生は必ず長靴をはいている。そして、大きな袋を持って川辺りへと降りて行く。何をするのかと見ていると、泥にまみれた石や木切れなどを拾っては袋に入れていく。私たちはそんな先生に不思議がって尋ねた。

「先生、何を拾うとるん？ そんなん拾うて何をするん？」

「絵を描くんだよ」とだけ答えて、ニコッと笑う。



大平数子作、竹本三郎画『少年のひろしま』

やかにっていく。

終戦後、父親の仕事の関係で、両親、兄妹と広島に住んでいて、市内の中心部にある袋町小学校に通学していた。

当時、竹本先生は、その小学校の美術教師で全学年を指導していた。とても優しい先生で、私たち生徒は彼の授業を楽しみにしたものだ。十歳前後の子供に先生の年齢などわからずもなく、男性教師は三十代でも、おじさん先生に見えた。細身でひよろつと背が高く、話すときは見上げるようであった。

おおらかに開放的で、静物を描くときは、度々教室を離れた。

「今日は屋上へ行こう」

私たち生徒は屋上で円陣になって、真ん中に置いてある大きな花瓶に無造作に活けられた花を描く。一年に一度コンクールがあつて、私が五年生の時二等賞になり、廊下に飾られたことを嬉しく思ったりした。そうすると、ますます美術の時間が楽しみになった。

何もわからず、そう言い返す私たちに、先生の心を推し量れるはずはなかった。

大人になって初めて、偶然にも竹本先生の絵、『元安川の石』に出合った。あの不思議な行動を目にして以来、数十年を経て私の前に『元安川の石』がある。

その絵は明らかに抽象画だ。タイトル通りの「川」が流れている訳でもなければ、「石」がゴロゴロしているのではない。黒色、灰色、焦げ茶色、茶色、そして赤。そういった色を基調に、シャープな線が交錯している。その背後に、ゆがんだ円や楕円形が沈み込んでいる。これらが「石」

なのか。塗り重ねられた油絵の具の中に、燃えるような赤が垣間見える。もしかして、これが広島のを、空を焦がした「炎」なのか。

絵の中に、長靴姿の先生が現れてくる。私たちの問いかけに向けられた笑顔が浮かんでくる。

数十年を経て、私は戦争の悲惨さや、原爆の残酷さを理解する年齢になっている。小学生の時わからなかった竹本先生の不思議な行動の意味と、今、向き合っ

いるのだった。

広島は川の町だ。市内には六つの川があり、元安川は町の中心部を流れる。

午前八時十五分、原爆投下直後、焼け付く熱さと喉の渇きで、この元安川にも多くの被爆者たちが水を求めて身を投げた。そして、そのまま息絶えた。川は人々で満たされたという。

広島には原爆で亡くなった人々の哀しみが、そして肉親を亡くした人々の苦しみが滔々と流れている。

竹本先生ご自身が被爆者なのか、それとも家族が、友人が、教え子が……ということ私は知らない。しかし、先生の絵には、描き続けたいではない、人間の「怒り」が込められているのだ。止むことのない「叫び」が描かれているのだ。

美術館を後にしながら、小学校時代の懐かしさがこみ上げてくる。柔和な笑顔の竹本先生の面差しが何度も浮かんでくる。

戦後三歳で岡山から広島に越してきた私には、身内の誰も原爆の犠牲になっていない。

私が袋町小学校へ通っていたのは、終戦後十年前後のころだ。竹本先生からも他の先生からも戦争や原爆の話は聞

た。広々とした美術館前の広場を、ゆつくりと歩いた。バス停に着いたが、このままバスに乗る気がなくなって、しばらく足の向くまま歩き続けることにした。歩きながら、竹本先生の絵『元安川の石』がもつ意味を、平和公園での先生の不思議な行動と重ね合わせて、あらためて問い続けた。

広島を去って、数十年という年月が過ぎた。現在も年に一、二度行くけれど、十代を過ごした「広島」は、はるか遠くに過ぎ去ってしまった。

子供の頃、猛スピードで復興する市街地の中、原爆投下後の廃墟という混沌で、家を失くした人々が川沿いに、ひしめくようにバラック小屋を建てて居住していた。

今その川沿いは、すっかり整備され、樹木の多い公園となり、人々に憩いの場を提供している。そこで散歩をしたり、ベンチに座って憩うとき、人々は川面に何を見ているのだろうか。

広島では現在も、市電が人々の足として大活躍している。町の風物詩ともなっていて、生活の中に溶け込んでいる。「チンチン電車」と言われる市電やバスに乗ると、いくつもの橋を渡り川を超える。

そういう広島を称して、「水の都」と言う。川沿いの散歩を「リバーウォーク」と称するそうだ。

いたことがない。私たちが幼かったからか、それとも語れないほど、おぞましく残酷であったからか。

広島は復興は早く、すでに電車やバスが市街地を走り、人々はそれなりの日常生活を取り戻していた。いや、懸命に一心不乱に取り戻そうとしていたのだと、今は思う。

本通りという繁華街は賑わい、百貨店や映画館は人々を呼んだ。東洋座での美空ひばり慰問公演では、何重もの人垣が建物を囲んだ。シルクハットに燕尾服、ステッキを持った十代の美空ひばりが、装飾のないシンプルなステージ上に立ち上がる。足の踏み場もないほど込み合った会場で、観客の絶叫が飛び交った。何という力強さ、何というたくましい復興だったのかと、今振り返ってみる。

無邪気に過ごしていた子供である私が、暮らしの中で目にしたことがある原爆は、夏であった。

半袖や薄着の人々の中に、紫色のケロイドを見たことがあるし、平和公園につながれていた馬の背中にケロイドが腫んで血が流れていた。高校生になったころ、人々や馬を見ることはなかった。死につながるケロイドが何かという認識もなく、何気なく目にしてはいた私は、今思い出すと恥ずかしいほどだ。先生や両親にそのことを訪ねることもしないほどに、日々の学校生活に浸っていた。

先生の絵と重なって、広島時代のことや原爆につながるいろいろな光景が、頭の中を駆け巡る。

けれど、私の中の「ヒロシマ」は、何十年が過ぎようとも、そういう呼称を拒んでいる……。



田中美晴

たなか みはる
岡山県倉敷市で生まれ、小、中、高校時代を広島で過ごす
大阪府豊中市で、公立中学校に勤め、定年退職。
第13回文芸思潮エッセイ賞優秀賞、第14回、15回奨励賞受賞

受賞の言葉

田中美晴

退職後、私の人生で出会った人々や出会った出来事など、どうしても書き留めておきたいことが湧々と湧きあがってきました。

この度の作品は、最も書きたかったことの一つでした。竹本先生の絵との出会いで、より深く、より強く原爆の残酷さを体験できたのではないかと思えます。

この作品が優秀賞を受け、文芸思潮に掲載されることが大変うれしく、何か安堵する気持ちを感じています。

仮の宿

高田智子

そのテントは、ある夜、忽然と現れた。黄色の、小さな可愛らしいテントである。犬の散歩をしていた私は、目を疑った。テントが張られていたのが、駅舎の階段下の、ちようど空洞になったところだったからである。風雨はしのごても、いかにせん夜には零下になる真冬のことだ。ホームレスだろうか。駅前の新興住宅地に越して来て間なしの私には、よく分からない。いつもなら、私の爪先を決して追い越さない飼犬が、そのテントに向かってぐいぐいと私を引っ張っていった。そして珍しく尻尾を逆立て吠え立てた。

一人用のキャンピングテントの中からひよいと顔をのぞかせたのは、七十歳くらいの女性だった。てつきり男性だと思っていた私は、二度びっくりである。彼女は、登山者のようにたくさん着込んでいた。ダッフルコートの上にスキー用のようなダウンジャケットを羽織り、ズボンの上からキルティングの巻きスカートを巻きつけ、顔は半分くらいマフラーに埋もれていた。その顔は寒さのためか、あか

ぎれている。テントの中は縦にも横にも老女一人で、奥には簡易ストープが赤々と燃えていた。老女は、私と犬とを交互にじろつと睨んだ。簡単には手なずけられない野生動物のように鋭い目つきだ。そして、すぐにまたテントの中に入って拒むようにチャックを閉めた。私は、後ろ髪を引かれているらしい犬を無理やり引っ張って、逃げるようにすぐ近くの自宅まで帰った。駅前広場を往来する人は他にもあったが、誰も彼も、関心と無関心がない交ぜになったような視線を送るだけで、足早に通り過ぎるばかりだった。帰宅すると、午後九時を回っていた。

その晩はなかなか寝付けなかった。夫は単身赴任中で、一軒家には私一人と犬一匹。窓の外を見上げると、牡丹雪が次から次へと落ちてくる。あの女性は、どんな理由があつて、今晚、屋外のテントを宿としなければならなくなつたのか。趣味のアウトドアだとしたら、あまりに酔狂だ。駅前とはいえ、深夜になれば人通りは途絶える。女一人の野宿とは、いかにも物騒だ。それとも今頃、駅員に立ち退

きを求められ、行き場を失くしたのではあるまいか。身の上を案じた。それより、どうして自分はこのことを見て見ぬ振りして立ち去ってしまったのだろう。駅前には交番があるのだから、知らせればよかったのだ。私は逡巡した挙句、夫に電話をかけた。私の話を一通り聞いた夫は、面倒なことになるといけないから、そういう厄介事に首を突っ込まない方がいい、と眠たげな声で言った。けれど、電話を切ったあとも、私のもやもやは一向に晴れない。とりとめのない思考のうずまきは、それでもやがて、泥のような眠気のなかに消えていった。

翌朝早く、犬の散歩にかこつけて、駅前へ向かった。その冬初めての雪は、十センチほど積もっていた。犬は大喜びでも、人間、ことに歳を重ねた人には骨身に染みる寒さである。果たして昨夜と同じ場所、同じ格好で、老女がテントを畳んでいたことから、彼女がここで夜を越したことを、私は察した。傍らには小ぶりのスーツケースが二つある。これからどうするのだろうか。広場で犬を遊ばせる振りをして、横目で観察した。心配半分、好奇心半分、というのが正直なところだった。老女はまず、テントを広場のベンチの足にくくり付けた。ビニルひもで入念にくくりつけている。それから、スーツケース二つを携えて、そばの自転車置き場へ入っていった。しばらくすると、スーツケースを、前のカゴと後ろの荷台にひとつずつくりつけた自

転車を押して、現れた。この雪では自転車に乗るのは危ない。彼女は荷物の重さでハンドルをぐらぐら揺らしながら、自転車を押したまま遠ざかっていった。テントは後から取りに来るのだろうか、と訝っていると、ちようどお巡りさんが通りかかった。

私は息せき切って彼に事の顛末を告げた。「ああ、あの人ね」彼は私の興奮を尻目に、こともなげに言った。こうしたことは、今が初めてではないそうだ。お巡りさんによれば、彼女の身元はとうに分かっているという。受け答えもしつかりしているし、今まで他人に迷惑をかけたわけではない。ただ、極度の不安症なのだ、と。彼女には身寄りがなく、一人暮らしなのだそうだが、その家が大変古い木造住宅で、台風や嵐が近づくと、家が崩れるかもしれないという心配から、家にいたたまれず、駅に「避難」してくるのだという。駅の方でもこのことを承知していて、半ば黙認している、と。以前、震災で家が崩れる経験をしたことがあるらしい、とさらにお巡りさんは教えてくれた。真夜中に、家の中に居るよりも、人気のない駅で野宿する方が安心、と考えているらしい彼女の倒錯した心境を思うと、胸が塞がった。帰宅恐怖症ならぬ、在宅恐怖症。昨今、不登校や引きこもりになる人の多くは、外の世界は怖いけれど、家の中は快適で安心、と考える傾向にあると聞くが、それは自分を守ってくれる家があつてのことである。

それから毎日、犬の散歩を口実に、朝に夕に駅前を通るようになった。二日三日、テントは依然くくりつけられたままである。それからしばらくしてまた雪が降った。テントは雪ですっぽり覆われて隠されてしまった。その雪が解けて再び鮮やかな黄色が顔をのぞかせても彼女は一向に現れない。今頃どこかで倒れていやしまいか。心配は雪だるま式に膨らんだ。ちょうど、引越して初めての町内会があったので、私は事の次第を聞いてもらった。「ああ、あのね」皆、顔を見合わせて微笑した。「どこの誰かは知らないけれど、誰もがみんな知っている」月光仮面ではないが、彼女はこの地域において、そういう立ち位置にあるようだった。あなたも暇人ね、とは誰も言わなかったが、そういう無言の圧に押されて、私は口をつぐむより他なかった。都市生活では、こうした他人を見て見ぬ振りでも、過ぎずの一種のマナーだとは分かっていたけれど、それでも、現代社会の行き過ぎた個人主義を少し憎んだ。

やがて一カ月近く経ち、ついにテントには、「警告」と赤で大書された貼り紙が付された。「至急移動して下さい。この物品は、このまま放置されますと、駅口広場条例の規定に基づき、保管場所へ移動します」——それから二週間ほどたち、テントは予告通り、撤去された。警告の張り紙だけが残されて、風に空しく揺れていた。

私が彼女を偶然見かけたのは、ちょうどテントが持ち去ると告げていた。「よかったら、うちに来ませんか」どうしてあんなことが口をつけて出てしまったのだろう。言っただけから自分で驚いてしまった。どこの誰とも知らぬ旅人を気軽に家に泊める、それは昔話の中だけのことで、何かと物騒な現代においては、かえって非常識だ。「とんでもない」と手を振って固辞する彼女を、しかし、私はそのまま帰すわけにはいかなかった。お節介な私は、彼女を半ば無理やり自宅まで引越張っていった。けれど彼女は、私の自宅へ入るのを頑なに拒む。押し問答を繰り返した挙句、彼女は消え入りそうな声でこう言った。「もし、本当に迷惑でなければ、お庭にテントを張らせてもらえませんか」わが家の庭は、四方を隣家に取り囲まれているので、なるほど風雨はしのげそうだ。「じゃあ、私も一緒にしていいですか」と今度は私が問うと、彼女は驚いて私を見返した。

一人用のテントに二人でおしくらまんじゅうして、その晩遅くまで話は尽きなかった。彼女は、私に、こんな立派な家に住めてうらやましい、それに引きかえ自分はヤドカリだ、と言うが、もし今、地震が起きて家が倒壊し、避難所での生活を強いられることになれば、ヤドカリの方がずっとその耐性があるだろう。社会の強者と弱者など、いとも簡単に反転するのだ。彼女と「仮の宿」で一夜を明かしながら、そもそも人生そのものが「仮の宿」だと習ったのは、学生時代の方丈記だった、と思い返した。今日存在

られた翌日だった。彼女は、上から下までこの前とまったく同じ格好で、広場を右往左往し、テントを固定したはずのベンチの下を、思案投げ首にのぞき込んでいる。私は声をかけずにはいられなかった。幸いにも彼女が私のことを覚えていてくれたので、貼り紙を示して、このひと月近くの経緯を話した。初めは警戒の色を濃くにじませていた彼女の目の奥は、徐々に緩んだ。足元の犬も、今回は吠えない。彼女は喉の奥から絞り出したような声でお礼を言った。彼女の話を聞けば、やはり私の不安は的中していた。このところずっと、ひどい風邪を引いて家で寝込んでいたらしい。テントのことはずっと気に掛かっていたが、一歩も家から出られなかった。いつもは、ちょっとした地震や大風でも家の中にいるのが怖いといって飛び出す自分だけれど、本当に身体の具合が悪いと「家出」も出来ない、と冗談めかして弱々しく笑った。

テントはもう処分されたでしょうか、と遠慮がちに尋ねる彼女に同行して、私たちは、都市整備部管理課を訪れた。近所の人に言えば、また暇人だと呆れられそうだが、新しい土地に越して来て近くに友人知人もいない、職探し中の私には、事実、暇な時間が山ほどあったのである。

「もう、あそこにテントを張るわけにはいきませんね」役場から、彼女と二人でテントを運ぶ道すがら、彼女は気弱に微笑んだ。そういえば、天気予報は、夜半から春の嵐、

しているものが明日も必ずあるとは限らない、この世の儚さ。私も彼女もそうした同じ「仮の宿」に一時滞在する人間同士だ。だから、「仮の宿」に留まる間は助け合おう。翌朝、彼女は庭中の草取りをして帰って行った。彼女の名前も住所も知らない。



高田智子 たかた ともこ
1985 滋賀県生まれ
2008 名古屋大学文学部卒
現在、高校国語科非常勤講師

受賞の言葉

高田智子

人生は仮の宿りに過ぎない——鴨長明の『方丈記』を習ったのは高校生のときでした。著者の説く無常観は、若い頃には実感できませんでしたが、コロナ禍にある現在、その意味が痛いほど分かります。けれど、万物は流転するということは、見方を変えれば、悪いこともずっとは続かないということではないでしょうか。この度は、拙作を賞に選んでいただきありがとうございます。主催者の皆様、選考委員の先生方に深謝いたします。